

# 女装 ペットの 性奉仕 調教

女装ペットを飼う時代

二角レンチ

体験版

R-18



# 目次

プロローグ .....	3
オナニー視姦 .....	8
口だけでフェラ .....	20
肉バイブとオナホで同時責め .....	32
騎乗位セックス .....	45
原作利用権 .....	57
プリンタでの印刷方法 .....	59
奥付 .....	60

# プロローグ

俺はこれから調教することになる男の子をじっと見下ろしていた。おびえた目。わずかに涙をたたえた潤んだ大きな瞳。わずかに紅く染まったほほと相まって実にそそる表情を形作っていた。

細い身体。こうして女の薄い服をわずかに身につけているともう女にしか見えない。おびえて縮こまった股間は勃起していないから、服の上からは男だとわからない。

若く美しくかわいく華奢で、やわらかそうでお尻は大きくて、とてもそそる。

はっきり言ってもものすごく好みだ。だが俺は調教師としてこの子の前に立っている。だから自分が欲情し興奮していることは隠さないとはいけない。自分の欲望を満たすためではなく、この子を立派な性奴隷にするためにこうして家に連れてきたのだ。

いや、奴隷と言ってはいけない。ペットなのだから。金持ちに飼われているペット。立派な仕事だ。合法的な。

昔と違って今はほとんど仕事が無く、あっても食っていくのが難しいくらい稼ぎが少ない。就職のために大学に行く奴なんてもういない。大学に入って勉強するのは金持ちの子供がする道楽だ。だからこの子のように、十八歳になって学校を卒業したらすぐ仕事につくのが当たり前だ。

仕事が無いので就職出来る奴は少ない。バイトでさえ中高年が奪い合っている状況だ。若くて仕事経験の少ない役立たずよりも、仕事を長年こなしてきて能力も執念もある中高年が採用される。

では社会に放り出された無能な若者がつく仕事は何なのだろうか。容姿が良ければ出来る仕事がある。唯一若いことが欠点でなく利点になる仕事と言え、当然その容姿を活かしたものになる。

モデルだの何だの優雅な仕事につけるのはごく一部の人間だけだ。あれは容姿だけでは足りないし、いくら努力しても足りない。金を積まないとなれない仕事であり、金の無い若者につける仕事ではない。

当然、若さだけが取り柄の人間につける仕事と言え、身体を売ることだけだった。昔は一部の女しか身体を売らなかったらしいが、

今は男も女も若くて容姿がいいなら身体を売る時代だ。この子のように、かわいい顔と華奢な身体の子は、女装させ女として扱うと男と女の色気が混じってとてもそそるものになる。だから人気がある。この子を買った金持ちも俺と同じくこの子の美貌に惚れたのだ。

十八歳未満の性産業への従事は厳しく取り締まられている。なぜ厳しく出来るかと言えば人が余っているからだ。

十八歳で学校を卒業したら性の仕事につく若者が多い。だから高値で売り買いするために十八歳未満の売買を厳しく取り締まるのだ。十八歳をおおっぴらに売り買いすることでようやく、昔は難しかった十八歳未満の売買をほぼ撲滅することに成功した。

性産業は風俗のように店が男女をそろえて客に提供するものもある。でも十八歳の若者のうち容姿のよい者たちがこぞって性の仕事をしようとするのだ。昔とは数が違う。当然値崩れをおこすので、風俗は極上の男女を揃えた超高級店以外は採算が取れず、ほとんどが廃業した。

ではどうするか。それが、十八歳の男女を買って飼う、すなわちペットだった。

忌まわしい奴隷制度はもちろん廃止されているし、厳しく取り締まられている。だから人を物みたいに扱う奴隷として売買することは出来ない。

現在合法なのはペット制度だ。ちゃんと法律で認可された仕事の一種だ。犬や猫をペットとして飼うときは虐待を法律で取り締まり罰則もある。人間も同様に、虐待その他ひどい行為をせず愛玩する限りにおいて、ペットとして飼うことが合法化された。

人一人をペットとして飼い、食わせていく。ひどい扱いは禁止されているがあくまでペットだ。部屋を与えずとも寝床を与えるだけでいいし、主人と同じ床につくのでもよい。食事はもちろん人間として十分な食事を与える必要があるが、高い物や主人と同じ物を食べさせる必要はない。ペットにするように主人よりは劣った食事でもよい。主人の食べ残しが十分な量と栄養があれば犬猫のペットと同じように残飯を与えてもよい。

ひどい扱いはしない。虐待などは禁止で罰則もある。ペットと同じように愛玩し、大事に扱う。でも人間よりはあきらかに劣る扱い。

それを認めたのがペット制度だ。その扱いに耐えるのが仕事なのだ。

最低限の服と食事。一人を飼うのは一人を養うよりもはるかに安い。だから庶民の家庭でもペットは飼われている。家事や育児さえも任せられるので、犬猫のペットよりもはるかに重宝される。

だが容姿美しく若い男女だ。安い家政婦で済ませるわけがない。

一番の目的は性欲の処理だ。ペットは主人の性行為を受け入れなければならない。虐待に当たる過度の性行為は駄目だが、普通の性行為の範囲ならば取り締まられることはない。

もちろんペットに対する性行為というのは一応禁止されている。だがかつてある種の特殊浴場が入浴料しか表示せず、中で行われる行為を黙認することで合法的に売春を行っていたように、ペットに対する性行為も人間に限り黙認され合法的に行われている。

一緒にお風呂に入って洗う、洗わせる。一緒に布団に入って抱きしめる。なでる。愛玩する。じゃれあう。ただそれだけ。いかがわしい性行為なんてしていないということになっている。

人間を合法的にペットとして飼えるようにしたことで、夫婦が人間のペットを飼うことが容易になった。これは若者のペット就職を増やすためにはとても大事なことだ。

人間より一段下のペットであり、浮気には当たらない。夫も妻も性欲解消のために浮気するのは許さないが、ペットなら許す。許せる。配偶者の浮気を防止し、配偶者だけでは満たせない性欲を満たすことが出来る。

夫婦円満の効果が大変大きいことが実証されており、健全な夫婦生活を営むためにペットを飼うのはもはや常識だった。家事や育児をさせることも含めて、費用対効果が実にすばらしく、若者の雇用という社会貢献まで果たせる。いいことづくめだった。

今の時代、夫婦共働きで育児をペットに押しつけても稼ぐのは容易ではない。だから普通、ペットの躾は主人である夫婦が自ら行う。

だが一部の金持ちは、自分の手を煩わせてまでそんなことはしない。そこで俺のような調教師の出番だ。金持ちは躾に手間がかかる場合、自分でするより調教師を雇って躾させる。

家事や育児を躾るのは普通、調教師ではなくその専門家に頼む。もちろん総合的に躾出来る調教師もいるが、俺は違う。

俺は性行為専門の調教師だ。調教師と言えば普通は性行為のみの

躑をする者を指す。俺に依頼してきた金持ちは、この子が性奉仕を上手く出来るようにしてくれということだった。

どうもいくら教えてもいまいち上手くならないらしい。初めは若い身体を貪るだけで楽しめた金持ち夫婦は、だんだんそれだけでは物足りなくなってきた。そこでこの子にあれこれ教えて奉仕させたのだが、教えてもなかなか上達せず、いい加減しびれをきらして俺に依頼してきたのだ。

調教師は腕がよくないと続けられない。俺は食っていける程度には依頼があるから、自分ではそこそこの腕だと自負している。

今回の依頼はハードな調教ではなく、あくまで普通の性行為をより気持ちよく奉仕出来るようにする調教だ。SMではない。

俺に依頼してきた金持ち夫婦はとても人がよさそうだった。ペットはこの子以外にも数人飼っており、そのすべてをととても大事に愛玩している。依頼を受けるときにその夫婦の屋敷に招かれたが、そこに侍らせていたペットたちは男も女もこの子と同じくらいまばゆい美貌の持ち主だった。

金持ち夫婦はこの子を溺愛している。決して粗末に扱ったり見下したりしているわけではない。ただ困っているだけだ。他のペットたちのように愛情持って躑ても性奉仕が身に付かないこの子に困って俺に依頼してきた。

この子だって主人夫婦の期待に応えたがっている。でも上手く応えられないことに負い目を感じている。

他の一般家庭で飼われるペットよりはるかにいい待遇。あの夫婦はこの子を大事に飼うつもりだが、この子にとっては性奉仕が上手く出来ないことは、いつ見限られて売られてしまうかと気が気でないのだろう。今びくびくとおびえているのは俺を怖がっているだけではない。ここで結果を出せなければ愛するご主人様たちに見捨てられる。それを怖がっているのだ。

彼は不安そうにときどき俺を見ては目をそらす。

かわいいな。おびえた表情が実にそそる。襲って犯して泣かせたい。仕事だからそんな乱暴なことは出来ないが、俺は自分の欲情を必死にこらえながらこの子を視姦し、これからの調教メニューを考えているふりをしていた。

ペットは主人のものである証拠の首輪をつけている。この首輪は

声帯に微弱な電気刺激を与えることで麻痺させ声を出せなくしてある。

ペットはしゃべらない。吠えない。口答えしない。拒否しない。家事や性奉仕をさせるために言葉を奪う。もちろん虐待は禁止されているので、ペットが抗議の声を上げるような行いをしてはならない。

首輪により言葉を奪うので、ペットはあえぐときも声が出ない。息を荒げるだけだ。声を出してよがる人間相手のセックスとは異質の興奮を楽しめる。たとえ外でペットをかわいがっても声で周囲にばれることはない。

愛情ある主人。愛情に報いようとするペット。ペットとはいえ一人の人間だ。今の時代では俺の考え方の方が変だが、俺はペットを人間より下だとは思っていない。一人の人間だ。立場が違うだけで優劣があるわけが無い。

他人のものである一人の人間に手を出す。調教にかこつけてものにする。てごめにする。存分に味わう。俺は調教のたびに他人の男や女を寝取っている悦びをひそかに楽しんでいた。

さてどうするか。女装の似合うかわいい男の子。金持ち夫婦にどこもかしこも味わいつくされている。あの夫婦は中年とはいえなかなか魅力的な容姿をしていた。あの美人熟女の膺でこの子は何度搾り取られたのか。あの男前の中年にこの子のお尻は何度掘られたのか。この子とあの夫婦のセックスを想像すると興奮する。ああやばい。そろそろ調教に入らないとな。こんなごちそうを目の前にしていつまでも我慢してられない。

他人にさんざん味わいつくされた身体。他人の色に染められた身体。それを俺が全部染め直す。性技をじっくり教え込み、極上の肉奴隷、いや肉ペットに変える。人のものを自分色に染め変えて芸術品を作り上げる。俺は調教により作品を作り上げるアーティストだ。

この子は素材が本当にいい。なんて美貌だ。男でも女でも欲情するほどの美しさに、若々しいかわいさが相まってもうたまらない。この素材に性技を仕込めば本当に素晴らしい一品になるだろう。

俺はペットを人間より下には見ていない。なのに同時に芸術品、物扱いするのはどういうことだろうな。くくく。

芸術品の方が、ただの人間よりも価値が高い。高い値で売れる。

そういうことだろう。人間より下でなく、上の物。いずれにしても物扱い。くっくくくくははははは。

## オナニ―視姦

俺は床に座らせている彼をじっと見下ろした。

そそる。本当に俺好みの、美しくてかわいい男の子。薄い女の服を着た華奢な肢体。

それをじっくりと眺めたい。楽しみたい。触ることなく目で愛でたい。

指一本触れることなく命令だけで痴態を演じさせる。それをじっとりと絡みつく目線で視姦する。奉仕を調教するのに必要で、かつ俺の欲望を満たす羞恥プレイ。

俺は調教にかこつけて自分の性欲を満たす。これで金をもらえるのだからたまらない。もちろん欲望の一部は調教にそぐわないので行えないが、それは仕事以外の相手で発散するのでかまわない。

「座ったままだ」

俺の声に、彼がびくりと顔を上げる。何を言われるのかと不安な顔。もっと困らせたくなる実にいじましい顔。

「座ったまま、スカートをめくってペニスを見せろ」

彼の顔がぼっと赤くなる。

「ご主人様である旦那様や奥様にはさんざん見せているのだろう？何を恥ずかしがっているんだ」

彼はうつむいてじっとする。俺は数秒待ってから少し強く言う。

「ペットは躰ないといけない。お前のご主人様たちの躰では温い。だからお前はいつまでもきちんと奉仕出来ないし、ご主人様たちはお前の躰を俺に依頼してきた」

彼は主人たちに対して申し訳なさそうにうなだれる。本当によくなっているな。どんなによくしてくれようが人をペット扱いするような連中にどうして愛情が持てるのか。俺はペットになったことがないから理解出来ない。

「恥ずかしがって頭がこんがらがって、パニックになるから上手く奉仕出来ないんだろう。あせって失敗ばかりするんだろう。頭が悪



くて躰られた奉仕を覚えられないわけではあるまい。だからこの調教は性技を教えるだけではない。恥ずかしくてたまらないことをたくさんこなすことで、恥じらいながらも躊躇無く行動出来るようにする。それが俺の調教だ。いいか。恥じらいを忘れてはいけない。恥ずかしい、でもする。それが大事だ。そんなふうにもたついて嫌がっているのは駄目だ。さっさとするんだ」

彼はびっくりとおびえる。主人夫婦に聞いてはいたが、主人たちは強く叱るということが出来ないらしい。かわいがるだけでは駄目な奴もいるのだ。叱咤し尻を叩かないと動かない奴には少々厳しくしないとイケない。

もっとも尻を叩くよりもきつくていやらしいことをするのだから。楽しみだ。さっさとこれぐらいの羞恥プレイは済ませて次へ進みたい。

だが調教とはいつもこんなものだ。すんなりいくなら金を払ってまで依頼してはこない。こいつはそう手強そうではないから、ちょっときつめに命令すれば従うだろう。

案の定、彼はおずおずと足を開き、スカートの裾に手をかける。その手が震えている。俺はぞくぞくする加虐心に顔がにやけるのをこらえる。

「言ったばかりだろう。俺の命令にはさっさと従え。そのままめくり上げるんだよ。言われた通りパンツは穿いてないんだろ。そのままめくればお前のかわいい生ペニスが丸見えになるぞ」

彼は顔を紅潮させ、ふうふう息を荒げている。うっすら汗ばむその顔がとてみなまめかしい。かわいい顔してすごく色気がある。男に尻穴をさんざん貪られていなければこれほど女の色気が宿ることはない。

彼はゆっくりと、スカートの裾を持ち上げる。十分上がりきるまでじっと待った。実に長く感じられる。彼がスカートを持ち上げその股間を丸出しにするのを待って、俺は上からのぞき込むように背を丸める。

「んん。かわいいな。縮こまって。いい色だ。奥様にどれぐらいしゃぶられた？ 何回膣にくわえ込まれぎゅっと搾り取られたんだ？」

彼の顔がさらに紅くなる。俺にペニスを見られる羞恥だけではない。奥様に抱かれたことを思い出しているのだろう。

彼のペニスがぴくりと動く。俺に調教される不安とおびえで縮こまったペニスが反応する。奥様とのセックスはそれだけ気持ちよかったということだろう。

「もっと思い出せ。そのまま指一本触れずに勃起するんだ。男が一番恥ずかしいのは射精を見られることで、二番目は勃起していく過程を見られることだ。小さなやわらかいペニスがどんな種より立派に芽を出し大きく育っていく様を俺に見せろ」

彼は目を瞑り、いやいやするかのように首を小さく左右に振る。そしてスカートを持った手を下ろそうとする。

「動くな」

俺がぴしゃりと言うと、彼はあわててまた手を上げてスカートを元の高さまで持ち上げる。

「いい子だ。素直に言えばやさしくするからな。叱られると怖いだろう。辛いだろう。どうせ調教が済むまでお前は愛しいご主人様の元へは戻れないんだ。調教が延びればそれだけ金もかかる。ご主人様たちを待たせることになる。そんなのいやだろう。迷惑かけたくないだろう。素直にした方がお前にとっても得なんだ。わかるな？」

彼はこくこくとうなずく。ああ。かわいい子を服従させるのは本当に楽しくてぞくぞくする。

「そのまま。足を開いてペニスを見せたまま。思い出すんだ。奥様はお前のペニスをどうやって握った？　どんな目でお前を見つめ、そのまま亀頭を口に含んだ？　キスするようにか。それともかぶりつくのか。大きな音を立ててしゃぶったか？　それとも貞淑なふりでちばちばとついばんだか？」

彼の顔がどんどん紅潮する。奥様にされたフェラを思い出している。

彼の縮こまったペニスが再びぴくりとうごめく。今度はそのまま、むくむくと膨らんでいく。

「お、お、いいぞ」

俺は凝視する。普通の男の勃起なんて醜いだけだ。でも女の子のようにかわいい男の子の勃起はとてもいじましくていやらしい。どんな男でも見たくなる。見れば興奮する。

「いいぞ。すごくいやらしいぞ。そのまま大きくするんだ。ギンギンにそそり勃たせるんだ」

ごくりと唾を飲む。くそ。情けない。興奮を隠せない。この子は本当に俺好みの容姿で、仕草で、恥じらいで、しかも妖艶だ。

ただかわいいだけではない。主人夫婦にさんざん抱かれ愛でられて、熟成された色気がある。この子を抱くだけでは飽き足らず、さらに奉仕まで上手にさせたいとは。あの主人夫婦の性欲は底無しだな。

男の子は首輪の仕掛けにより声が出せない。口を動かし頭を小さく振って悶えている。

俺が命令したので動くことも隠すことも出来ない。ただぐんぐんと膨らみ天に向かって鎌首をもたげていく勃起を俺にさらすことしか出来ない。

「奥様の前でもそうして勃起したか。手を使わずに勃起をするよう命じられたことはあるだろう。それとも奥様と二人きりになるだけでそうして膨らませてしまったのか」

凶星らしい。彼はあきらかにうろたえた。

「いやらしい子だ。心がいやらしいから身体もそんなにいやらしいんだ。小さいときのサイズに比べてずいぶん大きくなるな。勃起膨張率が高いほどスケベな証拠だ。お前はかわいい顔してとんだドスケベだよ」

彼は首を左右に振る。でも俺にののしられてあきらかに興奮している。ペニスが勢いよく跳ね上がり、とうとう完全に勃起した。

「ははっ。すげえ。でかいな。これだけでかいと奥様はずいぶん喜んだんじゃないか。なるほど。奥様がずいぶんとお前に執心するわけだ」

彼は小さく息を荒げている。勃起していく過程を見られるのはとても恥ずかしい。さらに性的にののしられながらの勃起だから興奮が半端ない。ただ勃起しただけで、彼は相当疲労していた。

「びくんびくんと元気だな。若い若い。くくく。ああ。それにしても立派なペニスだ。じっとしていろよ。じっくり観察してやる」

若い子の勃起ペニスはまるで別の生き物かのように激しく元気に動く。びくん、びくんと何度も脈打つ。大きく揺れるそれは俺を誘っているようだ。触りたい。握りたい。しごいて射精させたい。でも我慢だ。今回は彼に触れずに辱める調教なのだ。自分の欲望に従って好きにしていれば仕事にならない。

この仕事は対象が魅力的なほど我慢が苦しいので、想像されているよりはるかに辛い。欲情する相手と二人きりで、しかも調教だと言えば好きなように抱くことすら出来る。我慢出来ない意思の弱い奴には勤まらない。

俺は違う。俺はプロだ。触らないと決めたら触らない。それを徹底する。

顔を近づけ彼のペニスをじっくり眺める。いい形だ。左右への曲がりかほとんど無くまっすぐ上を向いている。でも反り返りはきつく、座っているせいで亀頭がお腹に当たっている。勃起しただけで包皮はきれいにむけてほとんど余っていない。少し薄めの赤黒い亀頭は花を思わせる美しさがある。血管のあまり浮いていない竿に張り出した裏筋。とてもきれいな造形だ。

「いいペニスだ。女が喜ぶ形と大きさ。それにこの元気さ。膣の中でびくびく跳ねさせると女は大層喜ぶ。奥様は喜んだか？ どうだった？」

彼はうつむいて目を逸らす。彼は自分に自信が持てないタイプなので、自信たっぷりにならずにうなずくことが出来ない。でも奥様の話では彼とのセックスでそのペニスには大変満足している。騎乗位で何度も何度も彼の限界まで搾り出す間、まるで萎えない元気なペニスは大変気持ちよく、何度もイけるそう。

彼はセックスが下手なので、正常位や後背位では奥様は満足出来ない。その腰遣いなどは俺が調教してやることになっている。俺のペニスを彼の尻に突っ込んで、手取り足取り尻取り直にたっぷり教え込んでやる。

彼の勃起ペニスをじっくり視姦し、彼を辱める。彼の息がどんどん荒くなる。びくびく跳ねるペニスからとろりと先走りが漏れ出す。「濡れたのか。触ってもないのに、見られているだけで。とんだ変態だな。いいか。お前はまず、自分がとんでもないスケベで変態で、四六時中いやらしいことをしないではいられない淫乱だということを自覚しろ。見られるだけでそんなぎんぎんに硬くし、さらに濡れるなんて普通ないぞ」

実際には普通だ。いやらしい目で見られればだれでも興奮を覚えるし、男は興奮すると勃起する。勃起し続ければ濡れもする。そんな生理現象も、いいように理屈をつけて調教に利用する。

彼の息が荒くなる。ペニスの脈動が早くなる。勃起を見られながらののしられて、しかも自分が変態だと言われて興奮している。普通なだけなのに変態行為をしているせいで、自分が本当に変態なのかもしれないと思い始めている。

調教は順調だ。彼の心も思考も性癖も俺が塗り変える。仕事だからな。俺好みに作り替える。それをさんざん楽しんでから仕事を終える。最高の仕事だ。やめられない。

「勃起を見られてそんなに興奮するんだ。男が二番目に恥ずかしいのは勃起していくところを見られることだと言ったよな。なら一番恥ずかしいところも見られたいんじゃないのか。それでもっと興奮の快感を味わいたいと思っているんじゃないのか」

彼はぶんぶんと首を左右に振る。いやがっているのは本心だろう。でもほんのわずかに望んでいる自分がいることを必死に否定しているようにも見える。

だれだって考える。勃起の次は射精も見られることを意識する。意識するだけ。考えるだけ。でもそれを、自分が望んでいるかもしれないと錯覚してしまう。人間の心理とはそういうものだ。調教はそれに都合のいい理屈をこじつけて相手の思考をコントロールする。「見られたいんだろう？ 勃起していくのを見られたときの快感よりもはるかに強烈な、視姦される悦びをもっと味わいたいんだろう？ いいよ。見ていてやるよ。射精してみろ。男の一番恥ずかしい瞬間を、俺に見せてみろ」

彼の身体が大きく震える。ぎくりとする仕草。おびえた小動物。肉食獣が小動物を襲うのは糧を得るためだけではない。おびえた小動物は襲いたくなるいじましさがある。俺は目の前の小動物を襲って食りたい衝動を必死にこらえた。

くそ。たったこれだけで何度我慢を強いられているのだろう。この子はそそりすぎる。俺は調教の際自分が我慢することも我慢プレイの一種として楽しんでいる。でもこれはきつい。この子は襲いたくなる何かがある。主人夫婦が溺愛し夫婦そろって食うだけの魅力がある。今回の調教自体は難しくないと思っていたが、俺が我慢するのがとても難しいようだ。

「ん？ 言わなくてもわかるだろ。俺は何もしないぞ。射精しろと言ったら自分で射精するんだよ。俺の目の前でオナニーしろと言っ

ているんだ」

彼が俺の目を見ては逸らす。また俺の目を見る。顔を真っ赤にして挙動不審だ。

「恥ずかしいのか？ 言っただろ。恥ずかしいことをたくさんして慣れるんだ。恥ずかしくてもする。お前がご主人様たちにちゃんと奉仕出来ないのはそうやって恥ずかしがってしどろもどろになるからだ。恥ずかしくてもてきばきと、求められたことをこなす。相手の望みを一所懸命叶える。それが奉仕だ。行動よりもその心を捧げることが大事なのだ。恥ずかしくても出来ないとは言っても、相手にとってはいやがってしたがいらないだけにしか見えない。そんなだから奉仕にならない。いいか。お前はご主人様たちをさんざん失望させてきたんだ。奉仕を求めてそのたびいやがられたと感じているんだぞ。ちゃんと奉仕しないのはいやがっていると取られても仕方がない。お前はご主人様たちが嫌いなのか。奉仕がいやでいやでたまらないのか」

彼は強く首を左右に振る。彼は主人夫婦を愛している。ペットはかわいがられれば情がわくし主人を好きになる。ただなついているだけ。ただ利用されているだけ。でもペットも、そして主人たちでさえそれを愛情と勘違いしている。情が移りなつて利用しているだけなのに。愛情？ うそつけ。そんなものこれっぽっちも無いくせに。愛情詐欺だな。

「ご主人様たちを愛して、本気で奉仕したいと思っているなら言われたことをすみやかにするんだ。いくら恥ずかしがってもいい。恥じらいを忘れるな。それでもする。頑張ってる。お前が再びご主人様たちに愛されるためには乗り越えないといけない試練なんだ。調教に失敗したらどうなる？ お前はご主人様たちに捨てられる。いやだろう？ それに俺も困る。調教に失敗したら金をもらえない。経費だってかかっているんだ。大損だ。しかも調教に失敗した調教師なんてもう仕事をもらえない。お前は俺を飢え死にさせる気か。おおげさではなく、お前のせいで俺の人生は終わってしまうんだぞ」

彼は目を大きく見開いて俺を見る。おどしすぎたか。いや。こういう手合いにはどんどん責任を押しつけた方がいい。主人に奉仕出来なくて申し訳ない。ちゃんと調教されなくて俺に申し訳ない。プレッシャーで潰れるならもう少しやさしくしないといけないが、な

るべく厳しく強く打つ方がより大成する。

彼なら頑張れる。彼は責任感を力に変える強さがあるはずだ。今までは甘やかされていたから必死になれなかった。今は厳しくする俺がいる。だから彼も必死に、真剣に取り組めるはずだ。

彼はしばらくおろおろしていたが、やがて目に力が宿る。おどおどした表情の中に一点、強い光がともる。

彼は震えながら自分のペニスに手を伸ばす。片手でスカートをめくり上げたまま、足を大きく開いてきゅっと勃起ペニスを握る。

彼はびくりと震えた。

「気持ちいいだろう？　さんざんののしられ興奮しているのに放置されっぱなしだったペニス。さぞかし敏感になっているだろう。自分の手で握っているのに、ただのオナニーとは違いすごく感じるだろう」

彼はこくこくとうなずく。喜んでいる。普通オナニーというのは気持ちよくない。自分の手が他人の手より気持ちいいと感じたことなんてないだろう。でも他人にののしられ、じらされ、視姦されれば興奮する。興奮が高まるとペニスは敏感になり、自分の手でも他人の手と同じように気持ちよくなれる。

「さあしごくんだ。いつもしているみたいに、いや、見られていることを意識しながら、見せつけるように、よりいやらしく見えるようにしてみろ。見られる興奮が快感になり、ただのオナニーとはまるで違う、フェラやセックスにも匹敵するほど気持ちよくなるんだ」

彼は潤んだ瞳で俺を見つめる。ペニスを握る手はほんのわずかに上下している。それだけですごく気持ちいいのだ。これ以上本気でオナニーしたらどれほど気持ちいいのだろう。快感への不安に戸惑っている。

「怖がるな。いくらでも気持ちよくなっていいんだ。乱れていいんだ。それを見るのが楽しいんだ。自分がよりいやらしくなり、より淫猥な姿をさらす。それを見せつけるのもまた奉仕の一種だ。お前のご主人様たちはお前のとんでもない痴態を見たがっている。しっかり身につけ物にしろ。きっと喜んでもらえる」

主人への奉仕が下手で困っていた彼。これを乗り越えればひとつ、主人へ喜んでもらえることが増える。不安と恥ずかしさをぐっと噛みしめ、彼は大きく手を動かし始めた。

にちゅ、にちゅ。すでにたくさんあふれている先走りを竿に塗り付けるようにしてペニスをしごく。粘つく卑猥な水音が部屋に鳴り響く。

彼は声を出せないから、口をばくばくさせても何のよがり声も出ない。彼のあえぎ声が聞きたい。でも聞けない。俺にとっての我慢プレイ。彼がペットでなければ声を殺す首輪などついていないものを。女よりもかわいい彼の声はきっとどんな女よりも透き通ってきれいな女声だろうに。くそ。仕事はペットの躰だ。だから首輪を外すことは出来ない。もっとも主人の持つ携帯からの暗唱番号入力が無ければ外せないからどのみち俺には外せない。

女の服を着たかわいい男の子が、大きく口を開けてよがりながらオナニーしている。でもそのよがり声はほんのわずかも聞こえず荒い吐息のみ。それだけでも十分興奮する。いや、下手すると普通に声を聞くより想像をかき立てられる分いやらしいかもしれない。

にぐちゅ、ちゅぐ、ぐちゅ。

汁まみれのペニスはぐちょ濡れで、しごく度にいやらしい音が鳴る。声が出ていない分この卑猥な水音が鮮明に聞き取れ、あえぐ以上のいやらしい演奏を奏でている。

「竿だけか？ そんな単調にしごくだけか？ もっといやらしくしろと言っただろう。俺をご主人様のつもりで、本気で奉仕しろ。いやらしいオナニーを見せろと言ったらもっといやしくなるように触るんだよ」

俺は怒ってはいないが、自分の興奮を隠すために怒気をはらんだ声色でうなる。さっきまでならこんなにきつい口調で言われたら彼はびくびくおびえていただろう。でも今は、見られながら、見せつけながらのオナニーの快感に溺れている。強い口調の命令に快感を覚えたら調教は一気にやりやすくなる。彼は俺の声に対しぞくりと身震いし、おびえの中にはっきりと恍惚の表情が見て取れた。

ぐずぐずせずに、すぐに手の動きが変わる。片手でスカートをめくり上げているので使えるのは片手だけだ。彼は竿を握っていた手をするすると上げていき、濡れそぼった亀頭を手で包み込む。

ぬちゅ。軽く握って小さく揺する。彼の亀頭は先走りまみれだ。それをあのやわらかそうな女みtainな手でやさしく握って搾るのだ。気持ちよくないわけがない。



彼がびくりと悶える。大きな潤んだ吐息を漏らす。竿ばかりしごいて放っておいた亀頭はとても敏感で、触るのが辛いくらい感じるのだろう。

「いいぞ。亀頭とカリ首を触れ。もてあそべ」

彼はくにゅくにゅと、手の中で亀頭を転がす。小指をカリ首にひっかけてこする。びくびくと震えながら背を丸める。でも見せないといけないのでまた背を反らす。

「まだ射精するなよ。射精しないようにあちこち触れ。指先で亀頭を弄愛（いちめ）るんだ」

彼の指が五本とも、別々の生き物かのようにうごめく。指を立て指の腹で亀頭をぬるぬるとしごく。裏筋やカリ首を滑るようになでては離れる。鈴口をこすりそのもどかしい苦しみに耐えられず指を離す。

亀頭から伸びた先走りの汁糸が指と繋がっている。糸を引いた指と亀頭はともにいやらしくてかっている。

「よし。次は玉だ。玉ももんでかわいがってやれ」

彼はこくりとうなずくとすぐに自分の玉に手を伸ばす。自分でオナニーしているのに自分がだれか他人の性器を責めているような錯覚に落ちているのだろう。あるいは自分が他人に愛撫されているという錯覚。命令されてオナニーすると、自分一人でするのは別種のプレイに変わる。

手についた先走りを塗り込めるようにして玉をもむ。左右の玉を手の平にのせて転がし、ときどき包み込むように握ってもむ。

「奥様にたくさんいじってもらったんだろう。思い出すんだ。とてもいやらしい触り方をされたことを。玉を口に含んで吸われなかったか」

彼は玉を手握り込んだままきゅっきゅと引っ張る。奥様に両の玉を口に含まれ引っ張るように吸われたことを思い出しているのだろう。

「そろそろいいか。もう我慢の限界だろう。射精していいぞ。奥様に責められたことを思い出せ。手で、口で、そして膣で責め立てられ射精させられたことを思い出しながら、激しく責め立て思い切り射精するんだ」

ようやく射精の許可が下りた。彼はもう辛抱たまらず竿を握り、

亀頭の先まで搾るように、手首をひねりながら大きくしごき上げる。

先走りですぶ濡れのペニスはあんなに激しく乱暴にしごいても痛くないようだ。ぬちゅんぐちゅんと大きな水音を立てながら激しくしごきまくる。

かわいい男の子が顔を真っ赤にしながら猛烈な勢いでオナニーしている。もう射精することしか頭に無い。俺に見られていることなど忘れていてのではないのか。もう少し見られることを意識しないといけないが、それはまたの機会でもいい。今はこの、本気オナニーを存分に鑑賞させてもらおう。

彼の全身がびくんと跳ねる。彼のペニスが離れて見てもわかるほど、ぐんと膨らむ。射精するときの急膨張。

「いいな。そのまま射精するんだ。天に向かって噴き上げろ。射精は男の一番恥ずかしい瞬間だ。それを俺に見せろ。見せつけろ」

彼が細く目を開けて俺の目を見る。その顔が羞恥にぐしゃりと歪む。そうだ。お前は見られているんだ。それを意識しながら射精しろ。見られる快感と羞恥を徹底的に覚えるんだ。

彼は口をぱくぱくさせ、ぎゅっと目を瞑る。こらえにこらえてもう限界だ。これ以上こらえきれない。

びゅっぐ、びゅ、ううううううううううっ。

噴火のように天高く、白く濁った精液が噴き出す。何も無い宙を舞い、彼の身体に降り注ぐ。

びゅぐん、びゅぐん、びゅるるどびゅん。

若い男の子の限界までこらえた射精だ。一回二回の噴火で終わるわけがない。彼は目を瞑り、よだれを垂らしひざをがくがくけいれんさせながら連続して射精する。

次々噴き出す精液は宙を舞い、彼に降り注ぐ。数度目の射精でもなおけっこうな高さまで噴き出す。なんて元気なんだ。若く元気で爆発するような射精。いやらしい。見事すぎる。

びゅっびゅ。ようやく少しだけ漏れる程度になる。十回以上は噴き出しただろうか。とにかく量も勢いもすごかった。

彼は服に、手に、そしてもちろんペニスにまで精液がかかってしまった。ザーメンまみれでペニスを握ったままあえぐ男の子。ごくり。本当にそそる。駄目だ。襲ってはいけない。でも襲いたい。

俺は彼にタオルを投げかける。彼はうつろな目で俺を見上げる。

「疲れたろう。よく頑張ったな。上出来だ。今日はここまでだ。タオルで拭ってからシャワー浴びてこい。そのあとは夕食の支度を手伝ってもらいな」

彼は赤いほほとゆるんだ瞳で俺を見つめる。明らかに欲情している。

そんな目で見ろな。これ以上は俺が我慢出来なくなる。これは仕事なんだ。俺は欲情して彼を襲ってはいけないのだ。

調教とはどんなに軽いものに見えてもかなり疲れる。肉体的にも精神的にも疲労する。連続して行うのはよくない。一日に一つだけだ。それがゆっくりに見えて一番効率的に身に付くのだ。

「わかっているだろうが、調教以外でオナニーしてはいけないからな。まだしたくても、もうするなよ。絶対だ。いいな」

彼はうなずかなかったが俺がにらむとしぶしぶといった感じでくりとうなずいた。

まだまだ身体がうずくだろう。調教を続けてさらに気持ちよくして欲しがっているのがわかる。だが我慢させるのも調教のうちだ。物足りない、まだ足りない、もっとしたい。次の調教まで一晩ずっと悶々とし続ける。調教されたくてたまらない、調教中毒になるように仕向ける。

俺だって我慢しているんだ。くそ。調教の続きだと言って、あるいは頑張ったご褒美だと言って一緒にシャワーを浴びながら彼を抱きたい。犯したい。でも駄目だ。調教は綿密なプランに基づいて行われる。最大の成果を得るためには欲情ごときに流されてはいけない。

俺は風呂へ向かう彼の後ろ姿を見つめる。なんてなまめかしい尻だろう。スカートをひょいとめくり上げ、とっくに濡れているであろう尻穴にずぶりと突っ込みたい。

くそくそくそくそ。そそりすぎるぞ。彼は主人を愛しているしその忠誠心は信頼出来る。主人の期待に応えるために、俺の命令には絶対従う。風呂場でこっそりオナニーしたりはしないだろう。もししたら様子を見ればわかるしな。我慢しているかすっかりしたか。

俺の方が限界だ。俺は彼がシャワーを浴びている間に、さっきの彼の痴態をオカズに抜いておくことにした。

# 口だけでフェラ

女装で床に座らせた彼を見下ろす。かわいい顔。小さな口。ふっくらした唇。今日は調教にかこつけてそのいじましい口をたっぷり味わわせてもらおう。

「今日の調教はフェラチオだ。それも手を使わないで口だけでするんだ。いいな」

彼の表情の陰が増す。おびえている。ああ。なんてそそののだろう。この子はおびえて憂いを帯びた表情が実に妖艶で、男でも女でも襲わずにはいられないほど色気が強い。

俺はわざとかちやかちや音をさせながらベルトのバックルをいじる。もたついて外せないふりをしながら不安を煽り立てる。

「フェラチオは手と口を存分に使ってするのが普通だ。でもお前は旦那様が呆れるほど奉仕が下手だ。手も口も同時にあれこれ覚えようとしても頭が混乱して無理だろう。まずは口だけだ。口と舌だけ動かす。集中する。手を使わずに、口だけでペニスを味わい愛撫するんだ。いいな」

彼は少しためらったあと小さくうなずく。主人である旦那様以外のペニスをしゃぶることに抵抗があるのだろう。

実にいい。主人への忠誠心からこの子は一生懸命この調教に励まなければならない。でも主人に忠誠を誓うほど愛しているから他の男のペニスをしゃぶることをいやがる。いやがるけどしないといけない。いやがる男の子に無理強いし、でも無理矢理なレイプではない。たまらない。素直に欲しがる女にしゃぶらせるより百倍楽しい。

俺はズボンを床に落とし、ゆっくりとパンツを脱ぐ。勃起していないペニスがだらりとさらけ出される。

彼は俺のペニスを見てすぐ目を逸らす。縮んだ状態でもナマコのような大きさにおどろいている。

「ご主人様のとどっちが大きいんだ？　なあ」

彼は目を瞑って頭を左右に振る。主人の名誉のために主人より大きいとは言えないだろう。でも俺は大きさには自信がある。きっと彼の旦那様よりも大きいだろう。

「小さいままではわからないか。じゃあ大きくなったあとで、旦那

様とどっちが大きいか比べるんだ」

彼はいやいやするように首を左右に振る。そして涙ぐんだ目で俺を見上げる。

もちろん主人とどっちが大きいか、それを強制的に言わせるつもりはない。これは調教ではなく単なる言葉責めだ。彼はその辺がわかっておらず深刻に困っている。さんざん主人夫婦と情事にふけているくせに世間知らずのウブな奴だ。十八歳でペットになるまで性経験が無かったそうだから仕方がない。

今の時代、容姿がよければ男女ともペット就職をするのが普通で、他の仕事にありつける可能性は低い。だからより価値を高めるために童貞や処女を守っておく。十八歳になったら性を売ることが当たり前になったことで、皮肉にも十八歳未満の売春や性行為は激減した。十八歳までは童貞や処女が当たり前で、経験済みの方が人生損していると馬鹿にされる。昔は童貞が馬鹿にされていた時代があったというが今では信じられない話だ。

あの奥様や旦那様が彼の童貞や処女を奪うところを想像する。いかん。まだ興奮してはいけない。勃起は我慢しないとはいけない。

俺はシャツも何もかも脱いで全裸になると、彼にのしのしと近づいていく。彼は男がペニスをぶらぶらさせながら迫ってくることにおびえ肩をすくめている。

「安心しろ。調教なんだから手荒なことはしない。……お前が大人しくしていれば」

彼がびくりとおびえる。かわいい。はあ。もっと弄愛たくなる。

床に座る彼の目の前に立つ。スカートからのぞくなまめかしい太ももをじっと堪能してから彼の顔を見、その目の前に垂れたペニスをつきつける。

「鼻を近づけろ。まずは匂いを嗅ぐんだ。愛しい旦那様以外のペニスの匂いを覚えろ」

彼は今の主人たちの元へペット就職するまで性経験が無く、もちろんだれかのペットになったからには他人と性交するのは禁止されている。だから旦那様以外のペニスは俺が初めてだ。人生で二人目のペニス。二人目の匂い。二人目の味。たっぷり教え込んでやる。匂いが口に染みついて取れなくなるまでしゃぶらせてやる。

彼が命令したにも関わらずなかなか嗅ごうとしないので、俺は苛

立った。

「お前な。これは調教なんだ。お前の旦那様の命令なんだ。旦那様を敬愛しているんだろう？ その命令に背くのは旦那様を軽んじているってことになるぞ。俺はいいんだぞ。そういうありのままを報告しても。でもお前は困るんじゃないか。旦那様に見限られてしまうぞ」

彼がとても哀れな目で俺を見つめる。ああ。いい目だ。ぞくぞくする。かろうじて涙をこらえた潤んだ瞳。大きな瞳いっぱい不安をたたえた湖。たまらないなあ。この仕事は実に役得だ。

もちろん旦那様に報告するわけがない。調教相手に逆らわれるのはなめられている証拠だ。調教する実力の無い半端者だということだ。調教がうまく出来ませんだの失敗しましただの、プロの調教師が言えるわけが無い。でもこいつはそういうプロ根性がわかっていないから、脅しとして効果てきめんだ。

彼は猫のように頭を上下に揺すりながら鼻を近づけてくる。ちょっと嗅いでは顔をしかめ、またちょっと嗅ぐ。

俺はちゃんとペニスを洗ってある。汚いわけではない。でもペニス特有のむわっとくる蒸れた匂いはけっこうきつい。この匂いが好きだというのはよほど淫乱で、そうでなければ普通は我慢が必要だ。

旦那様のは我慢出来ても俺のは我慢出来ないか。くくく。それがいい。きつい匂いのするペニスを無理矢理しゃぶらせ味わわせるのが実に楽しいのだ。

調教の範囲内で自分の性欲を満たす。そんな役得があり、金も並の仕事の何倍ももらえる。いい仕事だ。とても厳しく大変なことなのだから、金と役得がなければさすがに出来ない。甘い遊び気分で勤まる仕事ではないのだ。今だって勃起を我慢するのがどれだけ辛い。

俺は彼の髪をくしゃりとなでる。やさしくなでながらその女よりもやわらかい髪を堪能する。

彼の目がとろんと蕩ろけてくる。ペニスの匂いははっきりいって臭い。でもくせになる匂いだ。人間はフェロモンを感じ取る機能が失われたと言われるが、性器の匂いが否応無く欲情をそそるのはそれでも知っている。これがフェロモンでなくてなんだというのだ。臭かろうがいやだろうがこうして嗅がせ続けるとどうしても欲情す

るのだ。俺は彼を見下ろし、そのスカートが盛り上がっているのを見て満足の笑みを浮かべた。

「そろそろ欲しいだろう。でも今日はフェラチオだからな。尻はおあずけだ。いずれ入れてやるからそれまでは我慢しろ」

彼の顔がぼっと赤くなる。やっぱりな。ペニスを嗅ぎながら旦那様のペニスを思い出し、お尻を掘られる気持ちよさを思い出して勃起したのだ。

俺だって彼の尻にぶち込んでセックスしたい。でもセックスの調教はまた別の日にする。今日は我慢だ。俺も彼もセックスしたくてうずくのに我慢しないとイケない。我慢するほどもどかしく、興奮と快感がいや増す。フェラチオはフェラチオで、格別に気持ちいいに違いない。

「口だけのフェラチオだ。やり方はまあいろいろあるが、お前は下手だからな。単純に、ゆっくりとしていく方法を教える。いきなり激しいのは無理だろう。ペニスを味わうようにじっくりと責める。お前はペニスをごちそうと思って、その味を丹念にしゃぶりつくそうと心がけろ」

彼はこくりとうなずく。こいつは意外にスケベだからはじめはぐずるが欲情したあとは結構従順だ。そういう点では扱いやすい。

「まずは口を開けて舌を出せ。もっと大きく。めいっぱい開けて舌を伸ばせ」

彼は言われたとおりに、あぐりと口を開けて舌を突き出す。

「俺の目を見ながら舌先で亀頭をなめるんだ。ちろちろと、蛇のように舌を動かせ」

彼が上目遣いで俺を見つめる。うおお。淫靡だ。いやらしい。俺はぐっと歯を噛みしめて勃起してしまうのをこらえる。

彼の舌が、俺の垂れたペニスの先端に触れる。ちろり。ちぷり。わずかずつ、味を確かめるように亀頭をなめる。

「そうだ。いいぞ。少しずつ亀頭全体をなめろ。味を見るんだ。味わうんだ。旦那様とは違う味だぞ。おいしいか」

彼は返事をせず亀頭をなめ続ける。

「おいしいかと聞かれればおいしいと言え。まあお前は首輪の仕掛けのせいでしゃべれないからな。うなずくなり目で答えるなりしろ。実際においしいかどうかじゃないぞ。この変な味をおいしいと定義

しろ。この味はおいしいんだ。いいな」

彼はこくりとうなずく。目には涙が浮かんでいる。ペニスははっきり言って不味い。不味い物を無理にしゃぶらせるから興奮するのだ。

たしかに奉仕が下手だ。でもビデオみたいに激しくするのだけが気持ちいいわけではない。こうしてゆっくりとなめればそれなりに気持ちいい。

なめ方のコツは言葉で説明出来るものではない。味わうようにと言えばゆっくり丹念に舌を這わせるような動きになる。それが基本的なテクだ。ごちゃごちゃ説明せずとも適切な動きになる。これ以上は自分で相手の反応を見つつ変えていくしかない。

勃起しているならカリ首もなめさせるが、やわらかい状態では難しい。だから次はこうだ。

「よし。今度は亀頭を口に含むんだ。まだ竿まではいかない。亀頭だけを口に含み、飴玉みたいに口の中でなぶれ」

彼は言われたとおりに亀頭を口に含む。俺の目を上目遣いで見ながら舌で転がす。

「まだ早い。もっとゆっくりだ。やわらかいペニスをそんなに激しく責めても苦しいだけだ。やわらかいほどやさしく、硬いほど激しくだ。いいな。しっかり覚えろ。豆腐のように、赤子のようにやさしく扱え」

彼の舌がゆっくりと、慈しむようなくらいやさしい動きになる。ふむ。筋は悪くない。たしかに奉仕が下手だが、彼の主人たちは一度にあれこれ要求しすぎなのだろう。素人にはよくあることだ。興奮し、自分のして欲しいことを全部一度にやらせようとしてしまう。一度に一つずつ、注意と指導をしていけばちゃんと身に付いていくようだ。調教しやすい素直な子だ。

くう。気持ちいい。そろそろ勃起を我慢するのも限界だ。だが余裕が無いことを悟られてはいけない。

「ようし。じゃあそこで、竿まで口に含め。出来るだけ全体をほおぼるんだ。口の中で大きくしてやる。膨らんでいくその膨張をしっかりと味わえ」

彼がたどたどしく口を進める。彼の唇が俺の陰毛に埋まる。やわらかいペニスを口一杯にほおぼって茂みに顔を埋める彼がとても愛



おいしい。俺は思わずその頭を両手でつかみ引き寄せる。

「じゃあ大きくするぞ。しっかりとその変化を味わえ」

努めて余裕な声を出す、もう余裕なんかこれっぽっちも無い。言うが早いか俺のペニスは膨張を始める。

むくむくむくむく。ぐぐぐぐぐぐぐ。

熱くぬめる口の中で膨らませるのはまた格別だ。勃起を我慢したかいがある。これは実に興奮する。かわいい顔の小さな口の中で、入りきらないほど膨らませ硬くし涙をこぼさせる。

彼がじたばたする。苦しいのだろう。俺は彼の頭を両手でしっかり抱えて離さない。

「じっとしている。お前の愛しいご主人様にもこれをしてあげるんだぞ。これぐらい我慢しろ。もし吐きそうなら俺の腰を叩け。でも大丈夫だろう？ 何人も調教しているんだ。大丈夫かどうか俺にはわかる」

はあはあはあはあ。俺は心の中だけであえぐ。ここまで我慢したんだ。口の中で大きくするこの快感を最後まで味わいたい。

さすがにここまで大きくなるともう口に入らない。彼はのどまで使う訓練をしていないから、これ以上押し込んだままのどに挿入するわけにはいかない。残念だが、大きくなるのに合わせて少しずつ腰を引き、ペニスを口の外にはみ出させる。

「吸うんだ。硬くなったら口をすぼめて吸い立てろ」

ちゅ、ちゅ、ちゅううう。彼が苦しうに眉をひそめながら、それでも頑張って吸ってくる。

「いい、ぞ。その調子だ」

くそ。少しだけ言葉が乱れた。調教中に余裕が無いところは絶対に見せてはいけない。でもすごく好みの顔にしゃぶらせていると思うと興奮が漏れ出してしまう。

「これで完全に勃起だ。硬さと太さをしっかり確認しろ」

とうとう完全に勃起した。大きくなるのに合わせて腰を引き、口に入りきらない分をはみ出させていった。のどをついてしまわないぎりぎりのところに亀頭を埋没させてある。竿は半分以上も口からはみ出してしまっている。くそ。小さい口だ。

「よおく覚えろよ。今の限界はここまでだ。ここまでならくわえこんでも吐かない。絶対に吐いたりえずいたりしてはいけない。でも

限界ぎりぎりまでくわえこむ。その必死に出来るだけ飲み込もうとしてくれるいじらしさに男は興奮するんだ。いいな。しゃぶるときはぎりぎりまでくわえこむ。でも限界は絶対越えないこと。わかったか」

彼はくわえたままうなずく。頭を動かすと口の中でペニスがにゅるんとこすられ気持ちいい。

滅茶苦茶腰を振って彼の口を犯したい。

我慢だ。くそくそくそくそ。これは調教なんだ。欲望のままに動いてはいけない。

「よし。しゃぶるんだ。ゆっくりだぞ。口から少しずつ引き抜き、でも亀頭は口の中にくわえっぱなし。そしてまたゆっくりと口の中に埋没させていく。そのストロークを繰り返すんだ。その間舌でなめ回したり、唇をすぼめて吸いついたりを忘れるな」

彼は言われたとおりにゆっくりと口からペニスを引き出していく。小さな口から太いペニスがずるずると引き抜かれていく様は圧巻だ。

「吸いつくんだ。口から出しながら、でも離したくないという情熱を伝えるんだ」

彼があわてて吸いつく。すると口から引き抜く動きが止まる。

「落ち着け。でも興奮しろ。苦しいだろ。鼻息を荒くしてもいいんだ。むしろその方が喜ばれる。ゆっくりとでいいから一つ一つ物にしていけ」

これっぽっちのことでも一つをすると一つを忘れる。なるほど彼の主人たちが手を焼くわけだ。

顔を真っ赤にしたかわいい子が鼻息荒くあえぎながら、小さいお口を目一杯広げて太いペニスをくわえこんでいる。写真に、いや動画で撮りたいくらいいいやらしい光景。でも契約上撮影は禁止されている。

彼は亀頭を残して口からペニスを引き出した。そこで止まる。さすがに言い付けを忘れて口から全部出してしまっていたら叱責するところだ。

かわいがりたい。いたぶりたい。愛情たっぷりに愛玩したいペット。でも意地悪をして泣かせたい。こうも相反する感情を同時に引き出させる素材は珍しい。この子は原石だ。俺が磨いて彫って最高の芸術品に作り上げてやる。近年まれに見る傑作になるだろう。

「カリ首を舌でなぞれ。カリの高さを確かめるようにな」

いちいち指示をしないと動かないことに苛立つ。でもこれが調教だ。辛抱強く指導する。並の奴ならすぐにキレて無茶苦茶にする。だから調教師になれないのだ。

彼の舌が口の中で俺のカリ首をなぞる。ゆっくりとうごめくやわらかい肉の塊。ぞくぞくする。カリ首を舌でなぞられるのはすごく気持ちがいい。

「いいぞ。もっと味わえ。形も味も匂いもしっかり堪能しろ」

俺の匂いを、味を、形をマーキングする。他人のものであるペットに俺の印を刻み込む。俺のものにする。この寝取る感覚。しかもご主人様公認だ。たまらない。人のものに公然と手を出せるこの仕事は実に役得だ。

はあ。はあ。俺はさすがに興奮で少しずつ息が乱れてきた。全身にうっすら汗が浮いている。いい感じに血がたぎってきた。これからが本番だ。

「よし。今度はゆっくり飲み込んでいくんだ。吸いながらは難しいから舌でなめ回しながらだ。やってみろ」

彼は細目で俺を見つめ、指示を理解した意を示す。さすがにこれだけていねいに、やることを限定したら飲み込みの悪いこいつでも出来るだろう。

彼の顔がぐぐぐと近づいてくる。そのたび少しずつ太いペニスが埋め込まれていく。ちゃんとその口の中で舌がのたうち俺の裏筋や竿をなめまわす。

「いいぞ。その調子だ。気持ちいいぞ。これをしてあげればご主人様もきっと喜ぶぞ」

彼は目を細め、うれしそうにする。主人にちゃんと奉仕したい。でもうまく出来ない。彼自身とても悩み苦しんだだろう。でもこういうのは実践して慣れるしかない。いくら悩んだところでちっとも解決しないのだ。

きっちりと、はじめに確かめた限界まで埋没する。いいぞ。ちゃんとやれば出来るじゃないか。

「よーし。じゃあ繰り返してみろ。吸いながら引き抜く。なめながらくわえこむ。ゆっくりでいいからな。手順を確かめながらやれ」

彼はゆっくりと、たどたどしく、言われたとおりにする。ずいぶ

んもたつくがちゃんと出来ている。しかしさんざん旦那様のペニスをしゃぶっているだろうに、まるで初めてみたいなたどたどしさだ。これでは旦那様はたまったものではなかつただろう。俺としては初々しさを楽しめていいが、毎回こうではさすがにいらつくだろう。

俺は何度も同じ注意を繰り返しながら彼にフェラをさせ続けた。十分もしゃぶらせているとそれなりに上手くなってきた。

「あごが疲れただろう？　でも我慢だ。射精するまで口から離すな。頑張って繰り返せ。今日はこのまま射精すれば終わりだからな」

彼には疲労の色が浮かんでいる。くわえるのが辛いほど太いペニス。あごががくがくだろう。よだれがだらだら垂れて首と胸までぐっしよりぬらしている。女の薄い服がよだれと汗で身体にはりついてとても色っぽい。このままペニスを引き抜いて押し倒したい衝動をぐっと我慢する。

ちゅぱ、ちゅぶ、ぐちゅ、じゅるる。

ゆっくりと、でもだんだん早くなってきた。さすがに同じことの繰り返しだからいやでも上達する。調教に慣れていない素人はすぐに飽きて他のことをさせる。だから失敗する。覚えるまで同じことを単調に繰り返す。それが一番早く上達するコツだ。

他のしゃぶり方もいろいろさせたいがまずは基本だ。吸いながら引き抜く。なめながらくわえこむ。今日はこれだけだ。これだけで十分気持ちいい。

調教師たるもの当然射精もコントロール出来る。いくらでも我慢出来るしすぐに出すことも出来る。回数だって必要なら何回でも出せる。でも今日は一発だけだ。だから俺はこの一発で出来るだけたくさん出せるように射精を我慢する。

単調でもていねい。それを繰り返せば射精する。男を射精させられないほど下手なフェラというのはテクニックうんぬんではなく、ていねいさが足りないのだ。乱暴にするだけでは萎える。派手な動きをするビデオを見て知識を学んだ奴らはそこら辺がわかっていない。

「いいぞ。くう。その調子だ。気持ちいいぞ」

人はほめられるといい気持ちになる。もっと頑張ろうと思う。やる気を出させるにはほめるのが一番だ。性技の調教なら気持ちいいとほめてやるのが一番効果的だ。

もちろん本当に気持ちいい。俺はたくさん出すためにこらえているが、もう射精してもいいぐらいだ。

彼は熱心に頑張っている。フェラというのはされる方だけでなくする方も気持ちいい。硬い肉棒で唇を、舌を、口の内側の粘膜を何度もこすると痺れるような甘い快感がわく。相手を気持ちよくしながら自分も気持ちよくなる。彼のスカートにはすでに、盛り上がった山頂に恥ずかしい染みが広がっていた。腰をもじもじとよじらせながら必死にフェラをしているかわいい子。これで興奮しない男はいない。

「よし。そろそろ出すぞ。ラストスパートだ。激しくしてみろ」

彼は少し不安な目をして、でも意を決してしゃぶり立てた。さすがに動きに慣れただけあってスムーズでリズムカルに、素早くしゃぶってくれる。辛抱強く指導したおかげで、このかわいい子の上手なフェラを楽しめる。

動きは単調だが激しくて熱心だ。俺の精子を欲しがっている。飲みたがっている。ラストスパートを激しくするのはより強い快感を与えるためだが、食欲に欲しがっている様を見せることで視覚的な興奮をかき立てる意味もあるのだ。

ぢゅっぱぢゅっぱづるづるぢゅぶぢゅぱぢゅぢゅりゅりゅりゅ。

いい音だ。唾液をたっぷり口一杯にためながらしゃぶりまくる。はじめのたどたどしさからは考えられないほど上手に激しく頭を振って責め立ててくる。

「いいぞ。すごくいい。く。出すぞ」

お世辞抜きに上手い。この子は飲み込みが悪く、上手に教えないと身に付かないが、ていねいに仕込めばここまですぐに上達するのか。これは他の調教のときも楽しめそう。

ぢゅるんぢゅるんぐぷぷぢゅぷうううう。

「う、お、出すぞ、出すぞ」

余裕が無くなる。好みの子の上手なフェラチオ。他のいまいちな連中とは興奮と快感が違う。これは久しぶりに最高の射精が味わえそう。

びゅっぐ、びゅぐうううううううう。

彼の頭を両手で押さえ逃げられないようにする。こんな気持ちいいのはもちろん口の中に出す。引き抜くなんて考えられない。彼は

大量射精に目を丸くし、続いて涙をぼろりとこぼす。

「苦いか。不味いか。多いか。熱いか。苦しいか。我慢しろ。お前は旦那様のも上手く飲めずにこぼしてしまうそうだな？　ちゃんと飲むまでがフェラチオだ。俺は甘くないぞ。一滴残らず飲み干すまで離さないからな」

はあはあはあはあ。俺は息を荒げる。俺に余裕が無く興奮していることなんて、苦しんでいる彼にはわかりようがない。

ちょっとだけ。仕事を忘れて欲情を満たす。腰を揺すって射精を繰り返す。大量ザーメンを飲み込めず、口の端からだらだらこぼす彼の泣き顔をさらに責め立てる。

「こぼすなって。仕方のない奴だ。たっぷり飲ませてやる。おら追加だ」

どぐり。びゅぐり。まだ出てくる。たくさん出る。こらえにこらえたとはいえこの量は自分でもおどろくほどだ。興奮するほどたくさん出る。この子は本当に俺を興奮させる。

首輪の仕掛けのせいで声を出せない彼は、かわりに涙をこぼして訴える。それが俺の加虐心に火をつけさらに責めさせる。

「ほら。飲め。のどを鳴らして飲み込むんだよ。口一杯に広がるその不味くて臭い精液を、のどの中に流し込め。それとも口の中でもっと味わいたいのか。ならもっと練り上げてやる」

俺は円を描くようにして腰を回す。彼の口をすり鉢に見立て、俺の太いすりこぎ棒で精液をすり立てる。

ぐちゅぐちゅぐぽぐぽ。精液がたっぷり詰まった肉壺を肉棒でかきまわすのは異常な興奮をかき立てる。

「ほら。飲め。飲み込め。それ以上口からこぼすのは許さんぞ」

さっきまではまだやさしかった俺が、とても乱暴で強引になったことに彼はおびえ震えている。かまうものか。甘くするだけでは駄目だ。たまにはこうして厳しくしないと緊張感が保てない。そういう理屈ならいくらでもつけられる。俺は思う存分彼の口を責め立て興奮を晴らす。

ごくん。ごく、ごく。

彼がぽろぽろ涙をこぼしながら、でも飲まないといつまでも解放してくれないことに恐怖しながら飲み下していく。はあはあたまらない。飲んでいる。俺の精液をこんなかわいい子が飲んでいる！

「いい子だ。ほら。最後一滴まで飲むんだ」

俺は片手で彼の頭を押さえながら、もう一方の手で彼の口からはみ出している竿をしごく。根本から搾るように何度もしごき、尿道に残った精液をすべて搾り出す。

こく。こく。濃くてどろりと絡みつく精液は飲みにくい。彼は唾液でゆるめながら少しずつ、時間をかけて全部飲み込んだ。

彼が飲み終えたのを見届けてから、俺は腰を引いてペニスを引き抜いた。ふっくらした唇から醜い亀頭がずるんと抜け出す様は出産をイメージさせる卑猥さがあつた。

げほっげほっ。彼が激しくむせる。

彼のせきがおさまるのを待ってから、俺は彼の髪をつかんで顔を上向かせた。

「全部飲めって言っただろ？ こぼした分も全部飲むんだ」

俺は彼のほほにペニスをすりつけ、口からこぼれていた精液を拭う。精液にまみれたペニスを彼の口にねじ込む。

「ほら。ここも垂れているぞ。こっちもだ」

彼の首に、胸に垂れていた精液も、ペニスで拭っては彼の口に運ぶ。彼はそのたび顔をしかめながら精液をなめ取り飲み込んでいく。

「よし。最後はお掃除だ。しっかりなめてきれいにしろ」

俺は少しやわらかくなり始めたペニスをでろんと彼の目の前にかざす。彼は涙目で俺を見上げる。

「なめてきれいにするんだ。そこまでしてやっとフェラチオが終わるんだ。やれ」

彼を犯したい。むらむらする。彼の泣き顔はそそりすぎる。壊したくなる。もっと泣かせたくなる。でも我慢だ。今日の調教はここまでだ。俺は我慢するために口調がきつくなってしまう。

彼は舌を出してペロペロと俺のペニスをなめまわす。

「口に含んで吸え。最後一滴まで吸い出すんだ」

さっきしごき出したからもう精液は残っていない。それでも彼の温かい口に含ませ何度も吸わせた。

このままもう一回したいところだが、彼はもう限界だ。これ以上無理はさせられない。

「よし。いいぞ。よく頑張ったな。精液の味も慣れろよ。飲むのが基本だからな。旦那様のをろくに飲めないそうだが、何回でも飲め

るように鍛えてやるからな」

俺は最後に余裕が無くなり少し乱暴にしてしまったのをごまかすように、努めて平静な口調でそう言った。

危なかった。彼はそそりすぎて興奮が限度を超えてしまう。これからの調教はもう少し気をつけないとな。感情に任せて暴走するのでは調教師は勤まらない。

俺は彼にシャワーを浴びるように言うてから、服を着てその場を立ち去る。少し休んで落ち着こう。酒でも飲むか。くそ。こんなに我慢のきかない相手は久しぶりだ。本当に好みすぎる。

俺の物にしたい。俺のペットにしたい。でもそれは出来ない。仕事の関係でしかないのだから。でも俺は自分の部屋で酒をあおりながら、彼を自分のペットにして存分に愛情たっぷりにかわいがる妄想にふけらずにはいられなかった。

## 肉バイブとオナホで同時責め

俺は彼のあまりにいやらしい痴態に我慢出来なくなってしまった。プランをねじ曲げ、バイブの代わりに俺のペニスを肉バイブとして彼のお尻に挿入することにした。

プロ失格だ。でもそうと決めたら心がおどろくほど軽くなった。

こんな極上の逸材に次はいつ出会えるだろうか。おそらくもう一生無いかもしれない。彼は他人のペットだ。俺のものにはならない。なら調教にかこつけて楽しんでもいいじゃないか。一生に一度の機会だ。他の奴の調教は今まで通りちゃんとやるさ。

今回だけ、調教に役得を織り交ぜても罰は当たらない。調教はする。性奉仕の調教なんだから、あらゆる性行為は調教に組み込める。今までとは違い、ちゃんとした調教プランに欲望を満たす役得をほんの少しだけ織り交ぜる。調教に支障は無い。仕事はきっちりやるさ。でも我慢ばかりの仕事は十分してきた。ここらで一回くらいご褒美をもらっても罰は当たらない。

俺は心の中で必死に弁明する。欲望を仕事より優先させた時点でもうプロ失格だ。取り返しはつかない。でもプロでなくなりこの職を失ったらもう他の仕事なんて無い。食っていけなくなる。今の時



代、仕事も無ければ国の援助も無い。仕事で稼げない奴は容赦無く淘汰され見殺しにされる。

だから俺は必死に自分はまだプロでいられると自分に言い聞かせた。今まで築き上げてきたプロのプライドが音を立てて崩壊していくのをちまちまと言いついで塗り固めて補修していた。

ごちゃごちゃ考えなくて楽しめばいいんだ。まだプランは崩壊していない。ちょいと変更しただけさ。

俺は俺が見下していたアマチュアと同じことを考える自分を心底情けなく思いながら、でももう自分の欲望を止められなかった。

服を乱暴に脱ぎ捨て丸裸になる。勃起しっぱなしのペニスはぐんと反り返り、あり得ないくらいギンギンに硬く大きくなっている。今まで抱いた中で容姿が最高にそそる極上の獲物。その尻穴はきっと極上の性器に違いない。それに今から挿入する。興奮が押さえきれない。

俺はこのはちきれそうなくらい勃起したペニスを彼に見せつけたくて、彼の目隠しを取った。

彼はまぶしさに何度かまばたきしてからようやくうっすらと目を開く。俺は彼の上に跨り股間をその顔に近づける。

彼がびくりとおどろく。でもすぐに、目がとろんと蕩ろけて俺のペニスを物欲しそうにうっとり見つめる。

「これが欲しいか」

彼はこくこくうなづく。前も後ろもイカされて、彼はすっかり火照っていた。まだまだ足りない。ご主人様から離れて以来、お尻に肉の棒を入れていない。バイブでいくらイったところでやはり肉棒が欲しくなる。入れると言われ、立派な巨大ペニスを目の前にして、彼は発情を押さえられない。

「ご主人様より、さっきの太いバイブより大きいだろう。これを今からお前の尻に入れる。でも勘違いするな。今日のこれはペニスじゃない。肉バイブだ。挿入するが俺は動かない。ただのバイブに徹する。セックスじゃないんだ。勘違いするな。あくまでオナホとバイブの両責めだ。尻に肉バイブを入れたままオナホでペニスをイかせまくる。いいな」

彼は少しさびしそうな表情をしてから、仕方無しにうなづく。きっとこのペニスでがんがん犯して欲しかったのだろう。

俺だって同じ気持ちだ。彼を犯したい。セックスしたい。でも今日のプランはセックスではなくバイブ責めだ。だから俺は肉バイブとしてふるまう。

プランを欲望でねじ曲げた時点でもうプロ失格だが、俺はセックスせずに肉バイブとして挿入することで、かろうじてまだプランを維持し、プロでいられると自分に言い聞かせていた。

俺は彼の足の間にひざを下ろす。彼はひざを曲げ、待ちかまえるように足を開く。しばし見つめ合う。今から愛し合うかのように。

俺は彼に惹かれている。彼は俺のペニスを欲しがっている。互いを求めているという点では同じだ。彼も俺と同じ気持ちならなおよかったが、それは贅沢というものだ。

なんとなく恥ずかしくなる。セックスなんてさんざんしているのにどうしてこんな初々しい気持ちになるのだろう。こんな仕事をしているせいで久しく忘れていた甘酸っぱい恋をしているのだとようやく気付いた。

好きな子に挿入するなんていつ以来だろう。ずいぶん昔のことだ。だがこれはセックスではない。愛の営みではない。仕事だ。ただの肉バイブだ。俺がぎりぎりプロでいられる境界線なんだ。ここで負けてセックスに励んではいけない。

指やバイブで確認したから俺の人並み外れて大きなペニスもけがすること無く入るはずだ。でもこの華奢な子にこんな太いペニスが本当に入るのだろうか。不安になる。いや、大丈夫だ。いくぞ。

ぱんぱんに膨らんだ亀頭を彼のお尻の割れ目にあてがう。くちゅりと水音が鳴る。彼のお尻は大量の愛液があふれている。バイブでイかせただけではない。今、俺のペニスが欲しくてよだれを垂らしているんだ。

ぐっと力を込めて押し込む。小さな菊座が信じられないほど大きく広がり、巨大な亀頭をぬぼりと飲み込む。

あん。

彼の甘いあえぎ声が聞こえた気がして俺ははっと顔を上げた。

真っ赤になった彼と目が合う。彼は首輪の仕掛けのせいで声が出せない。だから声が聞こえたというのは気のせいだ。でもなんだか彼と通じ合った気がして胸が熱くなった。

「大丈夫か。痛くないか」

彼はこくりとうなずく。食欲に潤んだ瞳は早く入れてと促している。亀頭だけではまるで足りない。早く全部くわえたいのだ。

俺は力を込めて、ゆっくりと押し進める。熱い。濡れている。中が沸騰しているみたいに熱くて、でもやけどの痛みはなくただ熱い快感だけが沸き上がる。

なんて気持ちよさだ。

ぐっと力を込める。気を抜くと射精してしまいそうだ。まさかこれほどとは。間違いなく名器。まだ締め付けていない、ただ挿入しているだけでここまで気持ちよくなる穴は初めてだ。俺の人生で最高の肉穴。こんなすごいものが存在するなんて。

俺は余裕が無いのを悟られないよう冷静を装うが、きっと顔は我慢で歪んでいるだろう。余裕が無いのはばれられた。目隠しを取ったのは失敗だった。でも好きな彼に初めて挿入するのだから、顔を見なかったんだ。

彼も余裕が無い。ペニスと言えば今の旦那様が初めてで唯一の相手だった。こんな太いペニスを入れるのは初めてだし、バイブも含めてこのサイズは初めてのはずだ。今までに無い肛門拡張。中もみっちり押し広げられている。彼は相当苦しくて、でも気持ちいいのがその蕩ろけた表情を見ればよくわかる。

普通の男の尻穴は性器ではない。だから中も性器らしくなくて広い。対して女の素質のある男の尻穴は性器だ。よく広がりよく締まる。中も広いことはなくて狭い。膣のようにみっちり絡みついて締め付けてくる。

今までもそういう女の素質のある男を仕事でたくさん抱いてきた。どれも女の膣よりはるかに締め付け気持ちよかった。だがこれほどの逸材には出会ったことがない。まさに最高の名器だった。

「ふ、うっく」

かすかに情けない声が漏れる。恥ずかしい。挿入ごときで声を出してしまうなんてあり得ない。なんて気持ちよさだ。たまらない。

セックスで無く肉バイブだ。そう言っておいてよかった。こんなのまともにセックスしたら何秒も持たない。童貞みたいにあっという間にイカされてしまう。

俺は何とか根本まで挿入し、息を切らす。ただ入れただけ。その間ずっと射精をこらえ、かなり疲れた。一時間腰を振りまくるより

も疲れたかもしれない。

「大丈夫か。痛くないか」

彼はぴくぴくと震えている。痛くは無いようだが大きな異物が中一杯にみっちり詰まっているので苦しそうだ。

奥まで届いて内壁を押し上げている。奥が気持ちいいのだ。そこをつんつんと押してあげると彼はあきらかに喜んだ。

「今日の俺は肉バイブだ。このままじっとする。ガンガン突くのはセックスの調教のときだ。それまではお預けだ。お前も腰を振るなよ。わかったな」

彼はうなづく。返事代わりにきゅっきゅと締め付けてくる。

くうううううううう。

俺は猛烈にあせる。尻にぎゅっと力を入れて射精をこらえる。

危ない。くそ。軽く締めただけでこの気持ちよさ。鍛えていない奴なら今ので搾り出されていた。

なるほど。彼の旦那様が溺愛するわけだ。彼の主人たちは他にも若い男女を数人ペットとして飼っている。仕事の依頼で邸宅に伺ったときに見たそのペットたちはどれも美しかった。彼らは目の前の彼とは違い性奉仕もしっかり上手だ。にも関わらず主人夫婦は奪い合うように彼を食った。

特に旦那様はたまらないだろう。妻や他のペットにここまでの名器がいるわけがない。これに巧みな性技が備わったらと思うと、なるほど溺愛する彼を一時手放してでも調教して欲しいと願う気持ちはよくわかる。

彼をしっかり調教し、極上の名器と最高の性技が備わった、無上の快楽を初めに味わうのは他ならぬこの俺だ。調教をしっかりやればそんな今しか手に入らないご褒美にありつける。しっかりしないと。やる気が出てきた。

俺は崩壊したプロのプライドをわずかに取り戻す。ぐっと気合いを入れて射精をこらえ、さらに突きまくりたい衝動も押さえ込む。

俺は肉バイブだ。必要になるまで射精しない。いくら締め付けてきてもこらえる。出し入れしないならなんとか耐えきれんだろう。

「ようし。しっかり肉バイブの味を堪能しろ。ただのバイブとは違うだろう。こっちの方がいいだろう？」

彼はこくこくと熱心にうなづく。嘘は無い。生のペニスの気持ち

よさは無機質なバイブではとうていかなわない。

「じゃあ次だ。もう一度オナホを使うぞ。特別製のオナホだ。普通のオナホとはまるで違う快感だっただろう。入れただけで射精したものな。でも一回出して、今度は長持ちするだろう。じっくり味わえよ」

俺は彼の精液がまだ垂れるオナホを手にする。握るだけでも気持ちいいこれでペニスを包まれたときの快感といったらもう。今度はこれでじゅぽじゅぽとしごいてやる。

自分の精液にまみれた彼のペニスにオナホをあてがう。一回射精したにも関わらずまるで萎えない若いペニスは、再び特製オナホの快感を味わえる期待にぐんと反り返る。

俺は片手で彼のペニスを握り、根本付近をしごく。しごきながらオナホをゆっくりとその亀頭にかぶせていく。

あっあっ。

また彼の声が聞こえた気がした。幻聴だ。彼が口を開けてよがっているから声まで聞こえた気がするだけだ。

あるいは彼の声を知りたいという願望だろうか。ペットの首輪は主人でないと外せない。俺には彼の声を知る術は無い。

精液に加え、よく濡れる彼は先走りを次々あふれさせる。ローションには事欠かない。ただでさえなめらかなオナホは何の抵抗もなくにゅるりと彼の亀頭を飲み込む。

そのまま一気にずるんと挿入する。ペニスの根本まで包み込み、亀頭の先端は非貫通式のオナホの天井を押し上げる。

「どうだ。前も後ろも犯された気分は」

涙を浮かべ、にやけている彼の表情を見れば気持ちいいのが丸わかりだ。

「いいか。これは肉バイブを入れたままオナホで責められる調教だ。初めに言ったとおり快感を与えられ感じることに集中しろ。決して腰は振るな。自分で動いて求めるんじゃない。ただじっと、与えられるだけ。自分を捧げ、相手に全てを委ねる。射精も、絶頂も、じらしも、我慢も、全部相手のなすがまま。自分からおねだりすることも、求めて動くことも禁止だ。じっとしている。いいな」

彼のほほをなでながら強い目で見つめる。真剣な調教だ。本気の熱意は伝わる。彼も強くうなずき、快楽に負けて腰を振らないこと

を約束する。

「よし。では始めるぞ。オナホの気持ちよさを感じろ。気持ちいいときは力が入る。そのとき尻に肉バイブが入っていると思い切り締められる。何も入れていないよりも、入れていてそれを締め付けいきめる方がはるかに気持ちよくイける。この肉バイブは中の気持ちいい所をこするためではない。締め付けいきみ、オナホの快感を思い切り味わえるために使うんだ」

俺だって動いてこすってセックスしたい。でも肉バイブだから動かさない。思い切りいきむための道具に徹する。無機質なバイブをくわえ込むより生の肉バイブの方がはるかに気持ちいいから彼はきっと最高の絶頂を得られるだろう。

根本まではめたオナホをその位置のままゆっくりひねる。ろくろのように回転させて彼のペニス全体をこする。

彼は目を瞑りよだれを垂らして叫ぶようにする。この特製オナホの感触は普通ではない。並の女の膺よりはるかに気持ちいい。セックスとは違う、でもセックス以上の快感。

彼の菊座がきゅううっと締まる。

くっ。

俺は声が漏れそうになるのをなんとかこらえる。

なんて締め付けだ。気持ちよすぎる。締め付けられるたびに射精しそうになる。だがまだだ。まだ射精するわけにはいかない。肉バイブは射精しない。最後まで我慢するんだ。

こんな、今までで最高の締め付けを、あと何回我慢出来るというのか。それでも耐えなければならない。肉バイブとして挿入したからには途中で射精してはいけない。自分で選んだことだ。

きゅう、ぎゅううううう。

うおおおおお。

あ、危ない。また、こんな、くはっ、締め付けすぎる。

彼はお尻に太い肉バイブをくわえたままいきむとすごく気持ちよくなれることを覚え、積極的に締め付けてくる。おかげで俺は何度も耐えがたい快感に耐えるはめになった。

くうう。ううう。耐えるのがきつい。射精コントロールに自信のある俺が、素人みたいに死に物狂いでまったく余裕無く我慢していた。

射精寸前まで快感が高められる。その状態で我慢し続けるのは甘美な拷問だ。それにしても気持ちよすぎる。射精寸前のあの身悶えする気持ちよさをえんえん味わい続ける。

こんなの耐えられる奴がいるのか。極上の性器。最強の締め付け。これに腰振りや自在な内壁うねりなどの男を喜ばせるテクを身につけたらどうなるのだ。おそらく普通の人間なら一生得ることの無い、正真正銘天国の快樂を得られることになるだろう。

彼がじとっと絡みつく粘っこい視線を向けてくる。目を半分閉じたじと目。艶やかで淫靡。たまらない。

彼の目に促され、俺は彼の締め付けに耐えるために止まってしまっていた手を再び動かす。

オナホを根本まで挿入したままドアノブのように左右にひねる。ペニス全体をにゆるにゆるとオナホでやさしく愛撫する。

彼ががくんと仰け反る。がくがく震えけいれんする。イっている。ぎゅううううううううう。

「うぐ」

歯を食いしばる。かすかに声が漏れてしまった。これが絶頂の締め付け。こんなの。こんな強烈なの。

「あ、ぐ、ふ」

冷や汗がどっと吹き出る。涙までにじんできた。今までの人生で辛いことはたくさんあった。でもこの瞬間は、このほとばしる快感に耐えるのが人生で一番辛いことに思えた。

彼は手錠を引きちぎらんばかりに何度も引っ張る。仰け反ったかと思えば背骨が折れるかと思うほど背を丸める。

俺の手の中でオナホがぐんと膨らむ。

なんてことだ。俺は彼が射精してしまったと思ったが違っていた。彼は俺に言われたとおり、出来るだけ射精を我慢していたのだ。

絶頂の締め付けだと思ったのに、まだ射精を我慢している締め付けに過ぎなかった。絶頂時の締め付けが一番きつい。それがこれから襲ってくる。

血の気が引く。さっき以上に締め付けられたら、どうやっても耐えられない。

彼が思い切り仰け反る。頭と足で身体を支えながらブリッジする。ペニスを突き出すように天に向かって腰を突き上げる。とっくに根

本まで突き刺さっているのに、さらにオナホに挿入しようとするかのようだ。

彼のお尻は終始俺のペニスを締め付ける。彼が仰け反ろうが背を丸めようが抜けることは無い。俺の腰ごと引っ張られる。華奢な彼が菊座でペニスをくわえて俺を振り回す。その圧倒的な勢いに驚く。

ぎゅっぎゅっぎゅぐぐぐぎりぎり。

「くあ、ああああ」

声が漏れる。こんなの声を我慢出来る奴がいるのか。いるわけがない。こんな締め付け、あり得ない。

「あっぐ、ううぐぐ」

びゅっぐびゅっぐびゅびゅびゅびゅびゅ。

とうとう射精してしまった。肉バイブとして最後まで射精をこらえることを誓ったのに、彼の強烈すぎる締め付けにあっけなく搾り出されてしまった。

なんて気持ちよさだ。

意識が飛びそう。こんなすごい射精、初めてだ。今までで最高のセックスにおける最高の射精がかすんでしまうほどの衝撃。こんな、心も身体も溶けて崩れてしまうかと思うほどの、視界が歪んで見えなくなってしまうほどの快感なんてあり得るのか。

間違いなく俺は、今まで知らなかった天国へ迷い込んでいた。今まで天国だと思っていた快感はまだ天国の入り口に過ぎず、これが真の天国。至上の快楽。

「くあ、あ、うっぐ」

射精するたび情けない悲鳴を上げる。どんなに気持ちよくても声を漏らしたりしない。プロの調教師なのだから射精時の声ぐらい我慢出来る。

それがどうだ。声を抑えるなんて出来ない。歯を食いしばってもあごが外れそうになる。思わず口を開ける。のどの奥から悲鳴が漏れる。

「気持ちよすぎる、うふああああ」

童貞が初体験で漏らすような情けない悲鳴。まさかさんざんセックスしてきた今になって同じような悲鳴を上げるとは思いもしなかった。

腰を振る必要なんてなかった。というより気持ちよすぎて動けな



い。彼がぎゅっぎゅと締め付けるたびに精液が搾り出される。ただ強いだけの締め付けではない。濡れてやわらかく、それでいて弾力のある菊座。膣以上にみっちり絡みつく性器のような内壁。極上の性器と最高の締め付け。それは想像していたよりもはるかにすごい相乗効果をもたらし、他のだれでも不可能と思える無上の快楽を生み出していた。

快感に耐えるために手をぎゅっと握る。その手に握られたオナホをぎゅううと握りしめる。オナホに包まれた彼のペニスを圧迫し、ぎりぎり締め上げる。

彼は頭を左右に振り、ブリッジしたまま腰を上下にがくがく揺らす。彼に引っ張られて俺の腰も上下に揺れる。すごい力だ。あきらかに非力な彼が俺を振り回すほどの爆発力を生む絶頂。彼も特製オナホで人生一番の快楽を味わっている。同時にお尻でも同じような快楽を味わっている。前と後ろ。同時にイっている。天国の中の地獄かと思うほど、悶絶する快感。

とても長く感じられた。でもようやく彼も俺もおさまった。彼がベッドにぐったり寝転ぶ。俺はその上に重なるようにしてくずおれ、彼を抱きしめる。

はあはあはあはあ。

互いの荒い息がこだまする。

こんな気持ちよかったのは初めてだ。こんなに射精で疲れたのは初めてだ。

もう限界だ。なのに。

まだ足りない。

彼の中で俺のペニスは萎えていない。ありったけの精液を出し切ったのにまだ勃起がおさまらない。

俺はゆっくり身体を起こし、オナホを握る。その中にある彼のペニスは硬いままだった。

「じゃあ、続きをするぞ」

彼が涙を浮かべて首を左右に振る。もう前も後ろも最高にイった。もう十分で、もう疲れ果てていた。

「大丈夫だ。お前は快楽だけに集中すればいいと言っただろう。俺がしてやるのをただじっと味わっていればいい。疲れてぐったりしていてもかまわないんだからな」

もう一度、さっきの締め付けを。さっきの射精をまた味わいたい。身体が火照る。ペニスがうずく。たくさんの相手とさんざんセックスしてきてなお、今まで知らなかった快感があったなんて。もうその虜になっていた。もう一度味わうまでペニスがおさまりそうにならない。

俺はオナホを強く握りながら上下に動かす。空気が入りじゅっぽじゅっぽと音を立てながら、彼のペニスを責め立てる。

彼が目を瞑り、頭を起こす。激しい快感にじっとしてられない。また全身をなまめかしくくねらせながら悶える。手錠を引きちぎらんばかりに引っ張りまくる。

快感に耐えるため、お尻の穴をぎゅっと締め付ける。太いペニスを締め付けてくる。気持ちいい。最高だ。甘噛みするかのようにはぐはぐしてくるかと思えばがぶりと強く噛みついてくる。やわらかく弾力のある菊門でそんなかじりつかれると、痛みは無くただただ沸騰するような熱い快感が噴き出してくる。並の射精よりも気持ちいいのに射精しているわけではない。射精かと思う快感を何度も連続して味わう。

耐えられない。普通の人間ならおかしくなる。俺が腰を動かす必要も、彼がテクを使う必要もない。

彼の旦那様はいったい何が不満なのだ。こんなの、ただ締め付けられるだけで十分すぎる。これに性奉仕のテクを加えたいだと。どれだけ欲望が底無しなんだ。これにさらにテクが加わったらどれほどあり得ない天国へ至れるというのか。

このままやられっぱなしだと情けなさすぎる。オナホでじっくりじらす。そういうプランはとうに崩壊していた。こんな気持ちよすぎる締め付けの中で、じっくり責める余裕が俺には無い。俺はただがむしゃらに、彼を射精させるべく性技の限りを尽くした。

オナホを上下左右に振り乱す。抜くときも差し込むときも手首を回しひねりをきかせる。サイドブレーキのようにぐっと手前に引いたまま出し入れする。今度はお腹にくっつくほど前に倒したまま同じようにする。

亀頭だけを包んでちゅっちゅとキスするかのように小刻みに振る。全体をぬっぽり包み込んだまま振動させる。思い切り強く握ったままぐいぐい強しごきすると彼は涙をこぼし、悲鳴を上げるように口

を目一杯開いてよだれを垂らす。

「さすがに、連続だからなかなか出ないな。あと一回出したら終わりにしてやる。それまで頑張れ」

彼が射精するときに締め付ける。それで俺も射精してしまう。彼の絶頂時の締め付けは耐えられる次元の物ではない。太いペニスを思い切り締めることでお尻までイってしまい、彼は前と後ろの両方の絶頂を味わう。その両方に耐えようと締め付けてくるのだ。うそだと思うくらいの締め付けだった。

楽しみだ。あの最高の快楽をもう一度。俺は期待に胸を膨らませながら彼を責め立てる。

にゅっぽちゅっぽきゅっぽくっぽ。

特製オナホはバキュームフェラのように強く吸いつく。そのまましごかれるのだからたまらない。彼は何度も仰け反ったり背を丸めたりする。俺は彼の片足を腕で抱え、腰を密着させて固定する。

「暴れるな。今度は身動き出来ない状態でイかせてやる。苦しいぞ。思い切りのたうち回って発散出来ず、内に向け巡る快感に耐えるのは」

腕を手錠で拘束され、足と腰を俺に固定される。彼は上半身を弱々しくよじるが逃れられない。

このままイかせてやる。さらに激しくオナホを動かす。

指を交互に力を込めて、まるでうねるように締め付ける。弾力のあるオナホでむにむにとペニスを愛撫する。

にっちゃにっちゃといやらしい音を立てながらもてあそぶ。顔を真っ赤にして悶える彼を見てひどく興奮する。

なんてかわいいんだ。こんなかわいい子は、愛おしい子は初めてだ。そんな子のお尻にペニスを突っ込んだままオナホでいたぶる。ぞくぞくするほど楽しい。

はあ。はあ。はあ。はあ。

二人の荒い息遣いを聞きながら責めに没頭する。

そんな蜜のような時間も終わりを迎える。彼の反応が変わる。がちり押さえつけているにも関わらず彼が腰を跳ね上げようとする。

「イクんだな。射精をこらえろ。思い切りイかせてやる」

俺はオナホを両手で握る。竿の部分握り、亀頭の部分を手に包み込むようにして握る。

そのまま強く握る。彼がおどろいたような、苦しいような表情に変わる。

まだまだ。ぎゅううっと力を込める。

「この強握りのまましごいてやる。苦しいぞ。この中で射精するのはたまらないぞ。お前の尻はこれの何倍も締め付けるんだ。天国で、地獄だ。苦しいのに最高なんだ。きついから最高なんだ。お前の尻は最高の名器だ。それには及ばないが、最高のオナホで味わえる最高の射精を体験させてやる」

彼の顔が恐怖にひきつる。いい気味だ。俺にここまで余裕を無くさせてくれたんだ。少しはやり返さないと憤りがおさまらない。

俺は宣言通り、強く握ったままオナホを動かす。肉厚で弾力のあるオナホで強く締め付けると痛みより気持ちよさがあふれる。特製オナホの膣以上の気持ちよさで、尻穴に近いほどの強烈な締め付け。それに微妙な手の動きを加えて俺に出来る最高の快楽を与える。

握りしめるオナホを押し返さんばかりに彼のペニスが膨張する。射精するんだ。お尻に力がこもり、俺のペニスを食いちぎらんばかりに締め上げる。

「う、ぐ、いいぞ。限界までこらえろ。そして思い切り射精しろ」

手に握るオナホにどっと衝撃が響く。彼のこらえにこらえた精液が噴出したのだ。

びくん、びくん。俺の手を振り払わんばかりに彼のペニスが跳ね回る。彼が腰を浮かそうとするのを、全体重をかけてのしかかり押しとどめる。

犯しているみたいだ。実際犯しているのか。はあはあ。たまらない。興奮しすぎてもう。

ぎゅううううっと彼の菊座が締まる。中がうねる。射精の快感に耐えようと締め付けてくる。生の肉バイブを思い切りくわえ込むことでお尻も感じてイってしまふ。そらきた。あり得ないくらいの締め付けがさらに一段も二段も強くなる。みっちり弾力のある肉壁がこれでもかと押し寄せてくるが痛みは無く、ただただ甘く溺れる快感の波が押し寄せる。

「あ、あ、ぐ、はああ」

びゅっぐびゅるる。たまらず漏らす。彼の絶頂締め付けに耐えられる男なんていない。俺は二回目の射精にも関わらずあっけなく

搾り出されてしまった。

目がくらむ。視界が歪む。こんな気絶しそうな快感今までになかった。ああ。この尻穴最高すぎる。人生最高の性器にようやく巡り会えた。

容姿も、反応も、そして性器も最高だ。何もかも俺好み。俺にぴったりはまる。自分の欠けた半身に出会ったかのような気持ち。

恋。ああ。俺今好きな人に中出ししている。

幸せだ。久しく忘れていた、幸せというものを感じていた。愛のあるセックスは身体だけでなく心も気持ちいい。これがそうだ。仕事のセックスばかりで、心が温かく満たされるこの感覚をずいぶん長いこと味わっていなかった。

びくっびくっ。二人ともじっとしながら快感に震えていた。

どっと汗が吹き出る。彼の上にくずおれる。もう限界だ。疲れ果てた。出し切った。心底満足した。セックスではなく肉バイブ。出し入れせずにただ入れているだけ。彼に締め付けてもらうだけ。それだけで、今までのセックスよりも何倍も気持ちよかった。

はあはあ。俺は荒い息のまま、しばらく彼を抱きしめていた。

## 騎乗位セックス

俺はベッドの上で、彼を待ちきれなかった。さんざんじらされたペニスはもうあり得ないぐらい勃起し、血が集まっているせいでいつもより大きく、硬く、そして色が濃くなっていた。自分のペニスではないみたいだ。恥ずかしすぎる。彼にじっと見られると顔が熱くなった。

早く挿入したい。でも今日は騎乗位セックスの調教だ。彼に入れさせる。気を引き締めて教えなければ。

「もうこんなに、たっぷり濡れている。だからくわえなくてもいい。俺が早く入れたがっているのがわかるだろう？ お前のじらしが上手すぎてもうたまらない。じらすのが効果的なときとやりすぎなときがある。こういうときは相手の期待に応えてすみやかに挿入するんだ」

彼がうなづく。

「よし。俺の上に跨れ。でもまだ立ったままだ。そう」

彼は俺の腰の左右に足をついて立つ。目の前に、彼のスカートの膨らみが来る。

「そのままゆっくりスカートを持ち上げるんだ。そのいやらしくそそり勃ったペニスを見せつけるんだ」

彼がほほを赤く染め、はにかみながらスカートのすそに手をかける。両手でゆっくりとスカートを上げる。幕が上がり、見事なショーが繰り広げられる。

玉が見え、次に竿が登場する。そして亀頭までが丸出しになる。その先からは透明な糸がスカートの内側に続いている。先走りで濡れていた。

さらけ出し、見られていることで興奮し、さらに大きくなる。まだ勃起するのかとおどろくほどぐんと勢いよく反り返り、お腹にくっつくぎりぎりまで上を向く。

「はあ。はあ。いいペニスだ。いやらしいぞ。もっとよく見せろ」

彼は恥じらいの表情をしたまま大胆に腰を突き出す。貞淑な子が淫乱な振る舞いをする。そのギャップがさらに興奮をかき立てる。

「いいぞ。男はみんなペニスが好きなんだ。自覚していない奴が多いが人間はだれでも同性に性的興味を持っている。お前の旦那様も同じだ。旦那様はせいぜいちょっとしごいてくれるだけらしいが、ちゃんとお前がいやらしく差し出せば、ペニスに興味を示してあれこれしてくるようになる。お前のペニスはすごくいやらしい。だからきつと、旦那様も気に入るようになるはずだ」

彼がむっとした表情をする。二人きりでエッチしているときに彼の主人である旦那様や奥様のことを持ち出すと、彼は機嫌を悪くする。

「おい」

俺が彼をにらむ。彼はびくりとおびえる。

「これは調教なんだ。もっと真剣になれ。セックスを楽しみにしていたのだから浮かれるんじゃない。お前はあくまで、ご主人様である旦那様や奥様のために性奉仕を調教されに来ているんだ。俺とセックスする間、常に旦那様のことを考え、旦那様のペニスに奉仕していると思え。これは遊びじゃないんだ。一瞬でもそんな不愉快そうな表情をして相手の気分を損ねるんじゃない」

彼はびくびくとおびえ、しゅんとしょげかえり、やがて承知したことを示すためにうなずいた。

これでいい。俺だって彼と甘い一時を過ごしたい。でも駄目なんだ。セックスは調教の最終段階だ。俺は通常の性奉仕だけを調教するよう契約している。過激なプレイやSMの調教は契約に含まれない。だから最後まで、気分によって不機嫌な表情を見せる彼をそのままにはしておけない。彼のためを思えばこそ、もう甘えを許してはいけないのだ。

「よし。いい子だ。気持ちを切り替えろ。笑え。常に笑顔だ。奉仕する間ずっと、うれしそうにするんだ」

彼はぐっと眉をひそめ、そして顔を上げる。そこには温かいほほえみがあった。ここへ来た当初の作り笑顔ではない。本気で相手を気持ちよくしようという奉仕の気持ちが本物の笑顔を生む。

「そうだ。いいぞ。これはご褒美だ」

目の前においしそうに実る果実に手を伸ばす。彼のペニスを握るとぐっと反り返る。力強い。俺を愛撫している間中ギンギンにしていたペニス。俺以上にじらされ放置されていた。さぞかし敏感になっているだろう。彼は目を瞑り大口開けて声無き叫びを上げた。

首輪のせいで声が出せない。でも声が出ないからこそ余計に気持ちよさそうに見える。声が出るよりいやらしい。ペットは本当に卑猥だ。

きゅっきゅと数回しごく。どぷどぷと蛇口をひねった水道のように先走りがあふれ出す。びっちょり濡れた亀頭を手で包み、にっちゅにっちゅとしごいてあげる。

彼が口を震わせわななく。いい光景だ。すごく感じているのが見てわかる。

「このまま腰を落として挿入しろ」

彼がおどろいたように目を見張る。

「やれ」

彼が観念したかのようにうつむく。ゆっくりと腰を落としていく。

ぎゅっと亀頭を握る。ぱんぱんに膨れ上がった亀頭はこれだけ強く握っても手を押し返すほど張っている。強握りでしごく。悶絶する苦痛と快感が同時に彼を襲う。

彼が俺のペニスの向こうにへたりこむ。俺は彼を追いかけるよう

に上体を上げて、彼のペニスを逃がさない。

「どうした？ ほら、早く挿入しろよ」

にちゅ、にちゅ。いやらしい音を立てながら彼の亀頭ばかりを責め続ける。彼は頭を左右に振って悶絶する。

「苦しいけど気持ちいいだろう？ 苦しいから気持ちいいのに射精出来ないだろう？ 挿入するまでやめないぞ。ほらほらどうした。早くしないとえんえん続くぞ」

ご褒美と言いながらお仕置きしていた。調教はきっちり飴と鞭を与えなければならない。奉仕相手に不機嫌な顔をしたらどうなるか、きっちり教えておかないとな。

「ペニスはご褒美を与えるときも、お仕置きするときも、それを同時に与えることさえ出来る。だからお前のご主人様ももっと活用するようになるよ。俺がきっちり伝えておく。お前のペニスはご褒美もお仕置きも、存分に感じるように仕込んでおきましたってな」

彼の目にありありと恐怖の色が浮かぶ。ああ。本当に卑猥な表情だ。彼は望むと望まざるとに関わらず、人を欲情させる素質が人並み外れている。

「ほらあ。そんないい表情しやがって。もうたまらないじゃないか。見ろよ。俺のペニスを。年甲斐もなくこんなに何度も跳ねている。もう待ちきれないんだ。早く挿入してくれ」

彼は亀頭を強握りで責められ苦悶している。でも俺が本当に、挿入するまでこの地獄の快樂責めをやめそうにないのを悟ると、ふんばって上体を起こした。

俺の腰の左右に足をつき、がくがく震えるひざを立てて腰を浮かせる。俺はひざを上げて彼の手をつけるようにしてあげる。

彼は俺のひざを両手で持って、よじ登るようにして身体を浮かせる。かわいいお尻が俺の亀頭に当たる。

「力が入らないんだろう。そのままでいい。俺があてがってやる」

俺は彼の亀頭を握ってしごきながら、もう片方の手で自分のペニスを握る。前方に傾け彼のお尻の割れ目に差し込む。

亀頭がくちゅりと濡れた菊座に触れる。そこは触ってもいないのにびちよびちよに濡れていた。

「はあ。はあ。ここだな。いいぞ。そのまま腰を落とすんだ」

彼のひざががくがくと揺れている。彼の表情が切なげに歪む。待



ちに待った挿入。セックス。肉バイブとして動かないペニスを入れたときとは違う。正真正銘、ペニスを出し入れして気持ちよくなる。

俺は気付いていなかったが、彼も俺を愛していた。愛する人と結ばれる。彼は興奮し、俺の手の中でペニスがぐっと膨らんだ。

射精する？ まさか。俺はあわてて手を離した。

射精直前の膨張ではなかった。セックスへの期待で力が入ってしまっただけだ。でも苦しい亀頭責めから解放されて、彼は自由になった。

俺のひざに手をのせ身体を支えながら、ひざを立てスカートをはだけ勃起を露出させた彼が腰を落とす。なんて卑猥な光景だ。最高のエロい姿を鑑賞しながら俺のペニスは彼の中に飲み込まれた。

ずぶり。ずぶぶぶぶ。

たっぷり濡れている菊座は滑りがいい。指も舌も触れず、ほぐされていないきつきつアヌス。そこに体重をかけて一気に突っ込んだからたまらない。きつい入り口、みっちり絡みついてくる肉壁。早く強くくわえこまれる。あまりの快感に思わず腰が跳ね上がり、根本まで押し込む。

「うああああああ」

ブリッジするかのように仰け反る。たまらない気持ちよさだ。極上の快感。圧倒的に膨大な快感がペニスを襲い、あまりの気持ちよさに耐えられない。

駄目だ。出る。

「うぐ、ぐ、ぐ」

歯を食いしばり耐えようとする。でも彼の菊座は極上の名器で、射精コントロールを身につけた俺でも耐えられない。俺は童貞の初セックスかのように、入れたとたんに射精してしまう。

びゅぐっどっぐぐびゅるるるる。

「あああ、ぐうううう」

こたえられない快感。マグマのように熱くドロドロした快感が亀頭の先端からペニス全体へ、そこからさらに全身に広がっていく。血液が沸騰しながらかけ巡っているかのような熱い奔流。

「はひい、ひい、いいいいぐぐぐぐ」

俺は腰を浮かし、彼の尻に根本まで押し込んだままけいれんする。なんて情けない悲鳴だ。自分で聞いていて哀れすぎる。

彼は俺の上で目を瞑り、恍惚に震えている。俺が中に熱い精液を噴出するのを感じてよがっている。

ぎゅっぎゅ。彼がリズムカルに締め付けてくる。

「射精、しているのに、そんな、あぐう」

極上の名器。それがさらにこんな、巧みに締め付けてきたら快感は倍増する。彼は俺が気持ちよく射精出来るように締め付けてくる。でも締めなくても十分すぎるほどの気持ちよさだ。これ以上なんて耐えられない。

俺はがくがく震えながら大量の精液を放出する。長い射精の間ずっと最高の絶頂を味わい続け、体力を消耗する。

「はあ、はあ、あああああああ」

長いため息をつきながら脱力する。浮かせっぱなしだった腰をベッドに深々と埋め、ぐったりする。

汗びっしょりだった。いつの間にこんなに汗をかいていたんだ。快感に苦しんでいて気付かなかった。

「はあはあ。はあ、はああ」

俺が目を瞑り息苦しくあえいでいると、彼のやわらかい手が俺の額をなでる。

汗を拭ってくれている。彼の手は額からほほをなで、首をなでる。

違う。ぎくりとする。

彼の目はとても慈しむような温かい、うっすらと半分閉じたまなざしだった。でもそれは、射精で疲れきった俺を労る目ではなかった。

もう動いてもいい？ そう問いかける目だった。

俺は弱々しく首を左右に振る。彼はにっこり笑うと、俺のペニスが根本まで埋まったままの腰を揺すり始めた。

違う。いやがっているふりじゃなくて、本当にまだ駄目なんだ。そう言おうとしたが声が出ない。代わりにか細いよがり声が出てしまう。

「あっく、はぐ、ふうううう」

汗がどっと吹き出る。射精したばかりのペニスに熱い快感がわき上がる。

あり得ない。こんな、射精直後に射精寸前のたまらない気持ちよさが出てくるなんて。

また射精するかとびびる。でもさすがにそれは無い。射精直後にペニスを責められると苦しいものだがそれが無い。これが名器たるゆえんか。甘く強くいたたまれない快感だけがわき出てくる。恥ずかしくていけないことをしているような錯覚を覚える。

「あう、うっく、ちょっと、あ」

奉仕は相手の望みを敏感に察知しそれを与える。そう言ったのは俺だが、俺はまだ休んでいたかった。彼の目には俺がもう物欲しそうに見えたのか。

急激に快感がこみ上げて、俺は思わず上体を起こす。

「はぐっ」

ペニスに力がこもる。小さく揺るように腰を振る彼の中で、俺のペニスが射精前の硬さを取り戻す。

必要なら連続射精も出来るように、硬さも自在に出来る。それが勃起コントロールだ。だが今の俺は硬くしようとしていなかった。なのにもう、こんなに硬くされてしまった。

中で硬く大きくなったのを感じて、彼がくすりと笑う。目を細め、口をうっすら歪めてほほ笑むその表情は実に妖艶で、十八歳とは思えない熟した色気を醸し出していた。

ドキリとする。セックスしている彼はとても美しい。惚れ直してしまう。今まで以上に好きになる。

動悸が止まらない。愛する人に抱かれている。こんなに幸せなことは他に無い。

俺のペニスが硬くなったことで、彼は本気で腰を振り始める。

「はっはっああ、あああああ」

俺はじっと彼に身を任せ悶える。気持ちよすぎる。一回射精したからまだしばらくは出そうにない。おかげで極上名器の最高の腰振り快感を長い時間味わうはめになる。

彼は騎乗位で腰を振りまくる。上手い。まだ教えていないのに、結構上手いじゃないか。

相手を気持ちよくするにはどうすればいいか。彼は男で、主人である奥様ともセックスしているから、男が女にどう腰を振ってもらおうと気持ちいいかよくわかっている。でもおどおどしておびえ、上手くしなきゃとあせるばかりだった彼は、セックスで腰を振ってもご主人様たちを満足させられなかった。

今は違う。彼は自信にあふれている。今までの調教で、俺を何度も気持ちよく射精させた。さっきもそうだ。彼は自分の身体が極上で、落ち着けばとても上手に奉仕出来ることを知り、それが自信につながった。自信を持って落ち着けば、彼の頭は実に聡明で的確な奉仕を次々考え試し身につけていく。

すごい。このわずかの間でも腰の振り方が変わってきている。俺がどう動けばより気持ちよさそうな表情をするか、じっとりとなまめかしい目つきで観察している。彼の尻穴は気持ちよすぎて、俺はそれがそのまま表情に出るのを止められない。

にちゅ、にちゅ、ぐじゅ、ぎゅちゅ。

たっぷり濡れた菊門から汁があふれ出ている。すごい濡れ方だ。しかもそれにさっき中出した精液も混じっている。大量のぬめり汁にまみれ卑猥な音を立てながら、激しく動いていく。

彼は俺の上でひざを立て、手は俺の立てたひざに乗せている。背を反らし局部が丸見えになるよう大きく足を開いている。卑猥な結合部分が丸見えだ。彼の尻穴は俺の太すぎるペニスをやすやすと飲み込み、大きく広がっている。

その上では立派なペニスが真上を向き、腰を振るたびぶるんぶるんと振り回されている。なんていやらしい光景だ。見るだけでも興奮する。

彼は終始にんまりしながら、でも眉をひそめている。感じている。俺に奉仕しながら自分も気持ちよくなっている。

それは当然だ。相手を本当に気持ちよくしようとすると、自然と自分も気持ちよくなる動きになる。

セックスというのは互いが同時に気持ちよくなるのが一番いい。素人のセックスが気持ちよくないのは身勝手な男が女のことを考えずに自分だけ気持ちよくなるからだ。女を気持ちよくしないと男も気持ちよくないのに、射精すれば何でも同じと考える馬鹿どもはただ乱暴に腰を振るだけのセックスしかない。

彼が俺を気持ちよくしようとすればするほど彼も気持ちよくなる。彼の顔がどんどん恍惚に変わる。本当の気持ちよさは隠しようが無く顔に出てしまう。

口を開け、舌をだらりと垂らしながら腰を振るみだらな彼は、本当にいやらしすぎる。

彼が腰を上下に振る。ずるると竿が抜けていく。彼がいけない排泄感に震える。でもこっちもこの抜けながらこすられるのがとても気持ちいい。そして体重をかけて一気に腰を落とし、根本まで飲み込む。俺は動いていないのに、まるで思い切り突いたような豪快な挿入感が気持ちいい。彼の奥に亀頭が当たり、彼は背を仰け反らせてよがる。

じゅぱん、ずぱんと彼はその大きなストロークを繰り返す。このまま射精したい。そう思ったとたんに腰が止まる。

上下から一転、前後に腰を振りまくる。小刻みにすごく早く、ぐいぐいがんがん振ってくる。俺のペニスは頻繁に前に後ろに倒される。その度急な角度で彼の中を抉り、彼はびくんと目を瞑る。

「ぐううあ、これ、これは」

女の素質のある男は尻の中がゆるくない。膣以上にみっちりやわらかくひだのある内壁が絡みついてくる。その圧迫の中を抉りまくるのだ。ぬるぬる肉でしごかれまくり、快感が急激に高まる。

また彼の腰が止まる。俺が射精しそうになるたび腰を止め、射精させてくれない。

セックスしながらじらされている。前戯のじらしとは違うじれったさ。熱い肉に包まれながらおあずけだ。前戯のじらしがごちそうを目の前にしてのおあずけなら、セックスのじらしはごちそうを口に頬張りながら、それを噛みしめ味わうのを待てと言われるに等しい。どっちがたまらないか。そんなのわかりきっている。

「も、もう、俺」

彼はにいいと口を歪めてほほえむ。じらせばじらすほど気持ちいい。だから相手を思いきり気持ちよくしようと思えば、辛くて根を上げるほどじらさなくてはならない。

だから射精させてもらえない。彼は俺の射精感が落ち着いたのを見計らって、今度は左右に腰を振る。

スカートをはだけ丸出しのペニスがメトロノームの針のように、左右にびくびくと揺れる。いやらしい。エロすぎる。俺は食い入るようにそれを見つめる。

「はあ。はあ。あ、あ」

俺は相当スケベそうな表情をしているのだろう。彼はくすりと笑うともっと大きく腰を振り、ペニスをぶんぶん振り回す。

また腰の動きが変わる。俺のペニスを根本までくわえ、やわらかいお尻を俺の太ももに押しつけ擦り付けるようにしながら円を描いて腰を振る。

前後左右の動きが一気に襲う。ぐりんぐりんとダイナミックに腰を回すその迫力は圧巻だ。

「はあ、はあ、うっ、く」

快感がこみ上げる。もうたまらない。

騎乗位奉仕の調教だ。彼は指導するまでもなく上手くやっている。だから俺はじっとしていればいい。

でも極上の名器に包まれ、こんなに上手に責められて、我慢なんて出来るわけがない。彼は並の男とも女とも違う。どれだけセックスしたことのある熟練者でも、彼の前では我慢のきかない童貞に等しい。

俺は彼の両手首を捕まえると、猛然と腰を突き上げた。

彼がおどろいた表情をする。そしてすぐに、うっとりした顔で力を抜く。

俺が待ち望んだように、彼も待ち望んでいた。彼はようやく、俺に抱いてもらえるのだ。肉バイブでも性奉仕でも無い。今この瞬間は、俺に身を委ねて存分に抱かれていいのだ。

もう我慢出来ない。彼を抱かずにはいられない。こんな気持ちよく責められて、これ以上射精をじらされたら気が狂ってしまう。

ずばんじゅばん。激しい音を立てて彼を突きまくる。やわらかいお尻に俺の太ももが当たる。気持ちいい。そのたびペニスは根本までめりこみ、最高すぎる快感をもたらす。

「う、お、ふ、お」

彼の手首を痛いくらい握りしめる。でも彼は苦痛を表すことなくただただうっとりともどろんだ恍惚を浮かべている。口をだらしなく開け、舌を垂らしてよがっている。その顔を見れば、相当気持ちいいことがよくわかる。

セックスの間中彼は何度も締め付けてくる。その強烈な締め付けはそれだけで気持ちいいのに、さらに強く締め付けてくる。

「イくのか、イくのか」

彼ががくがく震えながら何度もうなずく。

「俺も、もう少しだから、一緒に。それまで、我慢しろ」

俺はとっくに限界だった。でもこの最高のセックスを一秒でも長く味わいたくて、射精をこらえていた。

猛然と腰を振る。突き上げるたび彼の華奢な身体は大きく跳ね上がる。そのときずるずると抜けていくペニスを亀頭だけ残す。そして腰を引いて下で待ち、彼の身体が下りてくるのに合わせてまた強烈に突き上げる。

とても荒々しいセックス。彼が壊れるんじゃないかと心配もしたが、極上の性器は男のペニスと欲望を余すことなく受け止められるように出来ている。彼のお尻は壊れるどころかますます食欲によだれをあふれさせながら、何度も俺のペニスをはぐはぐくわえしゃぶった。

「気持ちよすぎるぞ、ぐううううううう」

彼の腕を引っ張る。引き寄せながらズンと強く突き上げる。そのまま腰を浮かせて止まる。

彼が口をぱくぱくさせている。俺にはわかる。彼はこれでイってしまふ。

ぎゅううううううう。彼の菊門が、あり得ないほど締め付けてくる。

猛烈なセックス。強烈なとどめの一突き。彼の堤防は壊れ、快感があふれ出す。

彼は背を仰け反らせ、ぴくぴくと震えている。息が出来ないようだ。息を吐き尽くしてなお絞り出そうとしている。

この強烈すぎる締め付け。耐えようもない。俺もあえなく射精する。

びゅうううううううじゅびゅうううううううう。

長い射精。さっきあんなに出したのに、気持ちよすぎてまたたくさん出してしまふ。

「ふう、う、うううううう」

汗が吹き出す。気持ちよすぎて苦しい。強烈な射精。彼の中に大量に注ぎ込む。

彼のお尻はけいれんしたかのように、強く締め付けたままだ。肉棒全体が押し潰されそうなほど圧迫されたままの射精は苦しくて気持ちいい。

びゅるっびゅっびゅ。

長い射精が終わる。でも彼のお尻は締めっぱなしだ。じっとして震えたままだ。

長い。尻の絶頂は女の膣絶頂と同じように長い。射精より長く、射精より気持ちいい絶頂とはどんなのだろう。俺は尻穴をなめさせ気持ちよくなることはあるが、ペニスを入れたり絶頂したりしたことは無い。俺には女の素質が無いから彼のように尻で絶頂することは出来ないだろう。

彼ががくがくと大きく震える。げほげほと荒くむせる。ようやく息が出来るようになったか。まだ大丈夫そうだが、今度イくときにあのまま窒息したりはしないだろうな。

彼がぐったりと、俺にかぶさるように倒れ込む。俺はそれをやさしく抱きしめやわらかい髪をなでる。

「大丈夫か」

彼はうなずいたり首を振ったりといった返事をしない。ただぜいぜいとあえいでいる。

このまま今日は終わりにしてもいいが、まだセックスで何も教えていない。教えなくても彼は自分で考え試し身につけ、そして見事に実践してみせた。

でもセックス調教なのに何も指導せずこのまま終わるのも忍びない。それにさっき、俺が射精で疲れているとき彼は意地悪く笑いながら俺を責め立てたっけな。

もう彼に対して怒りを覚えたり憎んだりはいらない。ただ彼が愛おしい。かわいがりたい。弄愛たい。ようやく彼とセックスしたのだ。まだ足りない。もう一回、思い切りセックスしたい。

「よーし。すごいぞ。文句無く合格だ。前向きの騎乗位はこれでいい。次は後ろだ。後ろを向くんだ」

彼がおどろいた目で俺を見る。その目にはもう勘弁してくださいといった哀れな懇願がありありと浮かんでいた。

「セックスしたかったんだろ？ お前はスケベだからな。まだ足りないだろ。なあに。疲れて動けないなら俺が動かせてやる。背面騎乗位も覚えておかないとな。大きなお尻を弾ませながらする騎乗位はペニスを見ながらするのはまた違う興奮があるんだ。大事だぞ」

俺はにやにや笑いながら、疲れて動けない彼の頭をなでた。



# 原作利用権

原作利用権は、アイデアを原作として利用することができる権利です。

原作として利用するというのは、このアイデアをもとにしてあなた自身のアイデアで改変し、あなたが用意した絵などの素材で作品を作ることです。

漫画、小説、ゲーム、動画、絵本、演劇、映画などあらゆる作品の原作として使用できます。

アイデア以外の絵などの素材を利用することはできません。

例外として文章はアイデアそのものを述べたものであるため、必要に応じて一部あるいは大部分を使用することが出来ます。そっくりそのまま使うのではなく、あなた自身のアイデアで改変して使用してください。

本作品に収録されているすべてのアイデアは原作利用権付きです。

本作品を購入した人は誰でもそれを原作として、自由に改変した上で自分の作品を作ることができます。

体験版など無料で提供したものには原作利用権は付いていません。

原作として使用する際に一切の連絡、許諾、契約はいりません。

原作として使用する際は、原作者名を記載してください。原作、原案、アイデア提供など呼称は何でもかまいません。

原作：二角レンチ

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

原作、原作者および他のあらゆる人、物、団体等に対して貶める、損害や迷惑を与えるなどの行為を禁止します。

原作として使用することにより生じる一切の問題や損失、賠償等に対し原作者は責任を負いません。すべて自己責任で使用してください。

原作者はその原作を用いて作られた作品に対し、利用規定に反しない限り一切関与しません。作品内容に口を出すこともなければ、その作品から得た利益に対し分け前を要求するようなこともありません。

この原作は公開されたものです。そのため、未発表の作品のみを募集する賞などには使えません。

この原作はすべて自分で考えたオリジナルですが、既存の作品と似ていないという保証はありません。アイデアというのは世界中の誰かが同じことを考えているものであり、完全に誰のアイデアとも似ていないアイデアというのは存在しないためです。

原作の著作権を放棄しているわけではありません。この原作を使用して作った作品の著作権はその作成者にありますが、原作の著作権は原作者にあります。

二角レンチが作成、販売している原作利用権付き作品を購入した方は、以下に記載する二角レンチのブログ内の全ての作品についても原作利用権を有するものとします。

<http://originalmagazine.seesaa.net/>

<http://stockstackstory.seesaa.net/>

# プリンタでの印刷方法

この PDF は印刷して読みやすいようにデザインされています。

1. A 4 コピー用紙を用います。
2. 印刷範囲で「すべて」または「ページ指定」をします。
3. 「両面で印刷」「綴じ方：左」で「小冊子の印刷」をします。
4. 両面印刷で一枚につき 4 ページが印刷されます。
5. 中綴じ用ホチキスなどで綴じます。
6. 二つ折りにすると完成です。

A 5 サイズで手軽に読みやすい文字サイズになっています。

(注：お手持ちのプリンタがこれらの機能に対応している場合に限りです)

# 奥付

この内容を無断転載、複製して配布するなどの迷惑行為を禁止します。

この内容を閲覧、利用するなどして生じるあらゆる問題、損害等に関してこちらは一切の責任を持ちません。すべて自己責任で行ってください。

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

作品名

女装ペットの性奉仕調教

発行日

2013 年 2 月 1 日

著者

二角レンチ

ブログ・連絡先

<http://originalmagazine.seesaa.net/>